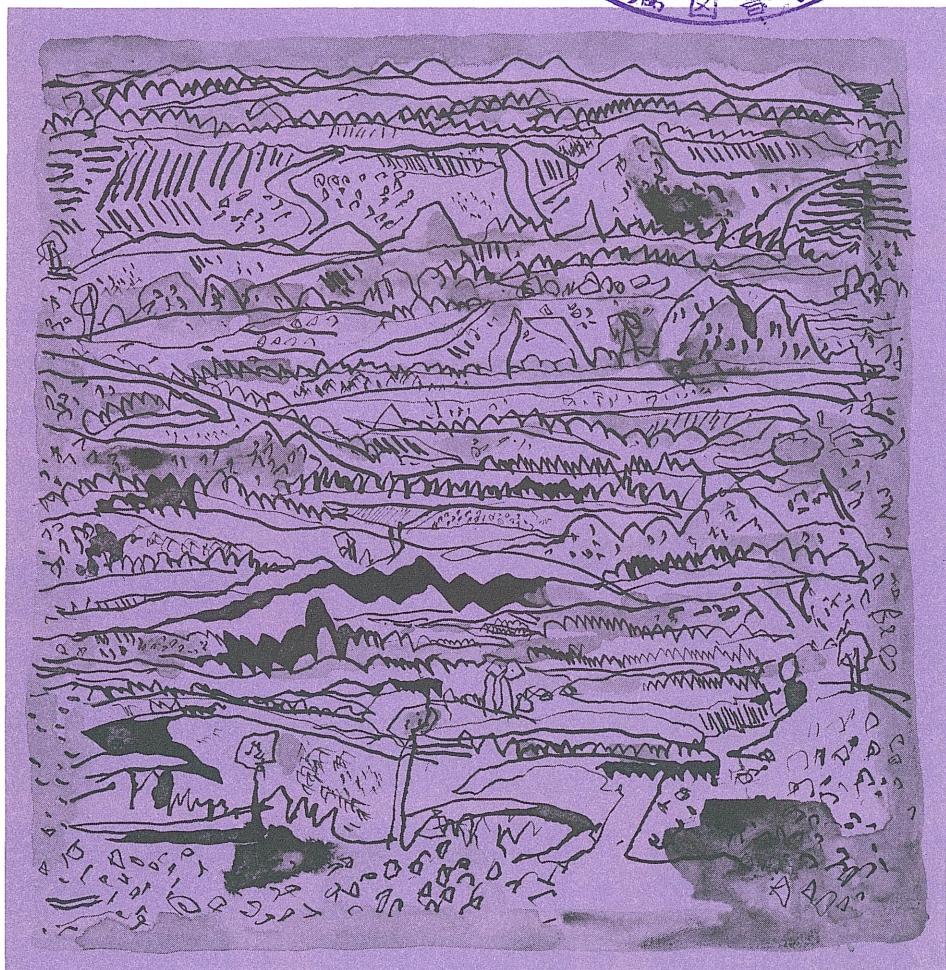


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

6



絶賛発売中!!

●フレーベル館創業70年記念出版●

これからの中保育 全6巻

大場牧夫 海 卓子 平井信義 本吉圓子 森上史郎 共著

●若い先生も、ベテランの先生も、原点に立ってもう一度“保育”を考えてみませんか。基本的な問題を考えてみませんか。あなた自身“これからの中保育”を確かなものとするために。



●平易な文章で語りかける全6巻。保育の実際例や座談会などが豊富に入っていて、読みやすさ抜群です。

A5 軽装版・各256頁
セットケース入り

セット価格(全6巻)

9,600円

〈第一巻〉

〈これからの中保育 1〉

「遊び」とは何だろう

〈第二巻〉

〈これからの中保育 2〉

「自由」とは何だろう

〈第二巻〉

〈これからの中保育 3〉

「課題」とは何だろう

〈第三巻〉

「生活」とは何だろう

「集団」とは何だろう

〈第四巻〉

〈これからの中保育 4〉

「遊び」とは何だろう

〈第五巻〉

〈これからの中保育 5〉

「自由」とは何だろう

〈第六巻〉

「課題」とは何だろう

「生活」とは何だろう

★ もよりのフレーベル館代理店・支社・支店・営業所へお申し込み下さい。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八卷 第六号





幼児の教育 目 次

—第七十八卷 六月号—

表紙
カット
油野誠一
中島英子

思ひたつ心のおこるとき

——子どもの世界と出会いたいと——

河辺 留美(4)

対談

“保育学”事始（その三）

守永英子／野田幸江

(8)

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文のお知らせ

(15)

わが幼かりし日の玩具と遊び

酒井 恒(16)

© 1979
日本幼稚園協会

二年保育のよさを見つめるなかで

——生活の基本をありかえる—— 柴田いつ…(22)

私の保育 向山陽子…(26)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考—— (その九) 海老沢敏…(32)

世界の子どもたち

遠い国の親戚マジヤール 西森禎子…(39)

◇児童文化探訪

紙風船屋さん 西森禎子…(39)

皆川美恵子…(44)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究—— (一十七) 津守真…(52)

史料紹介

『マイ・ダイアリー』④ エリザベス・ギャスケル 川真理子訳…(58)

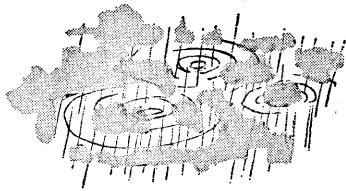
思ひたつ心のおこるとき

——子どもの世界と出会いたいと——

河 辺 紧

最近、「誕生の詩」や「だれがわたしをわかつてくれるの」など子どもについてのすばらしい写真集シリーズ四冊が刊行されているが、この著者であるスエーデンの若きカメラマンのトーマス・ペリイマンが昨年春に来日した時の講演の中で「なぜ私が子どもについて一生懸命になるのか」について次のようなことを語っている。

二十年前に脳腫瘍で入院していた兄がその死ぬ少し前目が見えなくなつていたが、病院の人々から「どうせ死ぬんだだから……」といつて自分を無視するような接し方をされたと泣きながら訴えていたことがとても印象に残つていて子どもについて何かをしたいと思っていた。そこでカメラマンになつて最初にし



た仕事は入院している先天性の障害児を撮ることだったが、そこで病院におきさりにされた、ほとんど胴体だけの子どもに出会った。その時から私は子どもから離れられなくなってしまった。そしてさまざまな環境の中での子どもたちの姿を撮って、「子どもとはいつたい何なのか」という問いを全世界の人々に向けて発しなければと決心した。さらに特にこのことは子どもたち自身にいちばんよくわかって貰いたいと考えた。なぜならば子どもたちならこの社会をかえていくことができると思ったからだ…。(傍点私)…

私にはこのペリイマンの声が怨念の叫びのようにも、また神の啓示のようにもきかれた。そして時間を経てペリイマンの子どもの世界との出会いの暖かく、強く、きびしいものを感じると共に二十年前も今日も少しもかわらず弱い子どもたちは勿論、多くの子どもたちが世界のいたるところでおきざりになつているという厳肅な事実にハッとさせられ、もつとこうした事実を直視しなければと考えさせられたのである。しかも彼は事実の直視のみでなく「フォト・ドキュメント」という自己の特技をいかしてこれを通して世界の人々へ「子どもとは…」をアッピールすることをおし進めてきている。しかもこの問題解決を大人社会に期待せず子どもたち自身に期待を寄せていることに注目せずにはおられないでのある。問題の深さや重みからこれを解決する空間と時間の余りにも

足らないのを感じるだけではなく、ベリイマン自身が大人社会の識見やその実践への意慾や実践力に対しての失望感や不信感をすらもったのではなかろうかとさえ感じられるのである。私たちはこのベリイマンの一語一語を世界の大人们への叱咤と聞いてよいのではなかろうか。

ところで、このベリイマンがもつたような子どもの世界と出会いたいと「思いたつ心」はその内容や度合いの程は異なっても、恐らく誰にもあるようにも思われる。直接子どもとの教育の場にある実践家や子どもを育てている両親は言うまでもなく、またどれ程理論ばかりを追求している研究者やこの方面の政治に関与している行政家といえども子どもの世界と出会いたいと思いたつ心をおこさせていることと思う。

しかし、問題は子どもの世界との真の出会い——感動のある出会い——があつたかどうかによってそこには大いなる差異のあることを認めねばならないと思う。「真の出会い」とか「感動のある出会い」と言つてもその体験の深浅は多様であり、またそこには必ず自ら発動する生長しようとする生命力をもつた代理不可能な存在としての人間への尊厳と信頼としか言いようのない何ものかが生じていることは言うまでもない。また「思いたつ心」とは思考するのみでなく現実化への努力がなされてはじめて「思いたつ心」と言い得るのである。

さらに私が言いたいのは「思ひたつ心のおこるとき」なのである。それは「発心」と言つてもよいであろう。それはまさに自然にわきおこる情緒が大事なのである。

フレーベルが二十五歳ではじめて子どもとの教育にたずさわった時の感動を兄への手紙の中にしたためた一節からもフレーベルの「思ひたつ心のおこるとき」がひしひしと迫つてくるのをおぼえるのである。

「私は今まで見たことのない、しかし常に憧れて居り、常に欠乏を感じていた何物かを発見したような心持ちがしていましました。ちょうど私の生が遂にその天賦の要素を発見したようなものでした。…私は魚が水を得た如く鳥が空を翔け上り得た如く幸福を感じました」と。そして彼は生涯この感激に生きつけたのである。

「国際児童年」というメッセージがあちこちでとびかわされているが私たちは「子どもの世界に単にひかれる心」に終らないよう子どもの世界に出会いたい、と思いつつ心のおこるときをそれぞれが確認しあいつつ、躊躇なく共にその現実化に努力したい。

(洗足学園短大)



対
談

"保育学"事始(その三)

—臨床と教育のあわいに—

守 永 英 子

(お茶の水女子大学
附属幼稚園
保育者)

野 田 幸 江

(愛 育 研究所
臨 床 家)

一人の大人が、一人の子どもと出会いう。その出会いを
かりそめのものとして葬らず、彼と歩みを共にしようと
するなら、そこに保育という営みが始まる。このとき、
保育者は、子どもに歩幅を揃え、歩調を合わせるために、
全力を傾けることを要請されるだろう。同時に、その背
には、人生の先輩としての役割をも負わされていて、文
化の伝承者としての使命にもこたえねばならないのだ。
但し、そこに展開される生活の内容を、一つ一つ取り
上げて見るなら、それらの多くは、何気なく見える日常
の瑣末事に過ぎない。然し、そのいずれもが、決してゆ
るがせにしてはならない厳肅な生活であり、教育の中味
なのである。

前回までのお二人の対談は、この経緯を中心いほどどの
鮮かさで浮かび上らせてくれている。そして、このこと
は、実にプロの保育者や臨床家にのみかかるものでは
ない。何故なら、人間の世界は、疑いもなく大人と子ど
もによって構成されているのだし、その歴史もまた、両
者によって織り成されている。それゆえに、私どもが、
人間である限り、子どもとかかわりなく生きることは不
可能なのであるから。

(本田記)

第七課 保育の周辺

—子どもをめぐる大人たち—

もは、サヨナラって帰つて行くわけでもないし、いつもいつ
も傍にいて、ヤイヤイ言つてるんですものね。

守永 そこが難かしいところなのね。

—前回までのお話し合いで、保育の基盤的なことがらには、一通り、光が当たられたように思います。そして、根本は、子どもと大人が、いかに生産的な関係を結んでいくかということに尽きたとも言えそうなのです。が、考えてみれば、これは、単に幼稚園の先生や、セラピストだけの問題ではないようです。あらゆる大人たち、特に、お母様などにとって、極めて重要なことのようと思われるのですが――。

守永 そうですね。私なんかも、余り忙しくて、自分に別な角度から光を当て直すひまがないと、ずるくと深みにはまってしまいます。お母さんと子どもを見ていると、本当に、そんな状態ね。考えるひとまもなく、翌日が来てしまつて、どうにも身動きがとれなくなる。

はだから見ると、あゝ、この母と子は、なるべくしてなったんだなって思いますね。お互いがそうちゅうてるのね。

野田 そう。それで、お母さんは気付かないのよね。まあ、子ど

野田 この頃はね、親もやらなければ子どもも変らないといふことで、セラピーも、パラレルに組んでやるんですよ。私も、お母様を相手にすることがあります。

でも、大人は、変りにくいや。何十年という歴史を背負っているんですね。

「自分で变ろう」という親は變りますね。でも、仲々、自分を見ない人もいるし……。(笑)

——いま、セラピーの場合は、子どもと母親をパラレルにおやりになるということでしたが、保育の場合に、子どもと保育者をパラレルに見て上げるなんてことが出来ないでしょうか。

母親の変るお手伝いをするように、保育者の変るお手伝いのしかたがないのか、否か……。

野田 私の経験から言うと、普通の幼稚園の先生で、障害児を受け入れた途端、とても変る人が多いですね。

つまり、いままで、自分の思い通りに子どもを動かそうとし、子どもも動いてくれていた。ところが、障害児には、それが通用しない。全く、今までのやり方が否定されたことに気付き、「さあ、どうしようか」と新しく思える人は、ぐんぐん變つていけますね。

そんな時、「やっぱり、問題児は困る」と排除する気持ちになる人は、変りにくいですね。折角、自分を変えてくれようとしているものを、排除してしまうんですね。そして、こちらが色々説明しても、本当に受け入れて貰えなくて、「結局障害児は大変よね」ということで終ってしまうみたい。

障害児を受け入れて、積極的にやつていく人は、「自分が

変った。変えて貰えた」ということを、はつきり言うことが多いですね。変らないと、生活していけないから……。

守永 障害児ではないわゆる普通の子どもの保育をしていると、そこに落とし穴があるのでしょうね。健康な子は復元力が強いから保育者のミスを、子どもが修正してくれるのね、そこで、保育者が自覚しないままに、過ぎてしまふ。

一方から言えば、それが健康児のよいところだけど、子どもの健康さに助けられて、自分を厳しくチェックする機会を持ちにくいのね。子どもの側に、はつきりしたトラブルが起つてこないからと言って、甘んじてはいけないんじゃないかと思います。もつとも、これは、私自身への自戒ですけどね。

野田 この間、ある親がね、四歳の子どものことを、盗癖がありますって言うの。自分の家では、お金を与えてないのに、近所の子どもの貯金箱から、十円玉なんか持つてきちゃうらしいの。お洗濯のたんびに十円玉が出てくるので、初めはご主人の落としたのでも拾ったのかと思っていたけど、近所の家のらしいとわかつて、びっくりしたのね。それに、幼稚園では、いつも暴力を振るとか、いろいろ出てきて、すっかり、問題児だと思いこんだのね。

それから、大騒ぎになつて、よその家に上っちゃいけないとか、色々と約束を設けたの。遊びに行きたいというと、「よそのおうちに上らないのね」と念をおす。「うん」「お約束できますね」「うん」というわけで外に出す。でも、子どもは、遊んでいるうちに、よその家に入っちゃうでしょ。帰ってきてたとき、「上らなかつたわね」と言うと「うん」。それが、上

つたとわかると、「どうして嘘をつくの」って怒る。

盗癖、虚言癖、暴力、とにかく大変な子どもだって言うわけ。

四歳の子なのよ。

そこで、私が、「遊びに出て、よそのおうちに全然入らないで遊べると思いませんか。一度やつてみて、出来なかつたら、もう二度と出来ない約束をしないようにしよう、とは思わなかつたのかしら」って言つたら、びっくりしてね。「約束 자체が悪いなんて、考へても見なかつた。守らない方が悪いんだって、思いこんでいた」って言うんです。チラッと見る方向を変えることが出来ないのね。

守永 相手との関係がこじれ出ると、むきになつて、相手を変えよう変えようとするのね。そうなると、自分には、光が当らない。

野田 それに、幼稚園の先生が、「この子は洋服を畳むのが下手だから、ちゃんとしつけてください」とか、いろいろ言うの。そこで、お母様が、にらみつけて目の前でやらせると、その子は、チャンと畳むんですって。幼稚園で言われたことをむきになつて、やらせる。その場ではやる。でも、園からまた注意される。「どうして、約束守らないの」って、親は怒る、まさに悪循環で、関係がちつとも変わらないのね。

守永 洋服を畳むことだって、技術としては出来るのよね。やろうとしないだけ。

野田 そう。何故、園ではやる気持たないのか、というアプローチが全然なくて、先生は先生で、家庭におしつけ、母親は約束という形で子どもを責めつける。だから糸がこんがらがるだけなのね。

そんな時、私は、保育者に言いたい。幼稚園で起こつたトラブルは、幼稚園で考へてほしい。「こうこうです」って悪いところだけ報告されても、本当に困るでしょ。親は、「園でチャンとやるんですよ」「泣かないでね」とか言つただけね。約束とか、言つてきかすことしか、親は出来ないでしょ。親のすることも一杯あるけど、園することも一杯あるの

に、それを、チョイと親にやつて貰おう、なんて思っちゃう。そうすると、親は、もつともっと親としての保育があるのに、先生から言われたことだけをヤイヤイやるのね。死にもの狂いで。そこで、関係は、益々悪化するつてわけ。その子は、ちゃんと畳むんですって。幼稚園で言われたことをむきになつて、やらせる。その場ではやる。でも、園からまた注意される。「どうして、約束守らないの」って、親はこの母子に自分がこういうことを言うと、関係がどうなるだろうか、なんてことがわかることが大事ね。保育者として

は、母親に要求したいこともあるわけだけど、「この子は、ここが悪い。あそこも悪い」という報告が、関係をいかに悪化させるかという洞察があれば、やり方もまた工夫されるでしょう。

それに、いま、この子が園でこうなのは、母親だけに還元すべきことなのか、自分の側の問題ではないかって、見直すことも出来なきやならないし……。

野田 音楽とか美術とか、色んな素養は、徐々に身につけていくてもいいのね。人間のことだけは、しっかり学んでおくことが必要ね。これは、保育者養成の問題になるでしょうね。守永 私自身も、いま、一番必要だと思ってるのは、臨床心理的な理解と技術ね。親と話すときも、「どうすればよいか」って言うことが言えなきや、つい、報告だけで終ってしまうでしょ。

野田 この間、あるお母さんに奥の手を教えて上げたの。保健婦さんをしている人の子どもなんだけど、幼稚園で問題が多いって言われたのね。しかも、「お母さんが働いてるせいじゃないか」って。甘えるとか、乱暴するとか、そんなことをみんな、母親が働いていることと結びつけるのね。そこで、その人は、すっかり悩んじゃったわけ。

だからね、こう言つたの。「先生に『家で、一生けんめいやつてみるから、一つだけ、大事なことを教えてください。毎日毎日やつてみますから』って、頼みなさい」とて。そしたら、先生が、「抱いて上げて下さい」とて言つたんですって。そこで、せつせと抱いてみたけど、よくならない。私は、また、こう入れぢえしたの。「先生の所に行つて、毎日々々抱いていますけど、どうですかよくなりましたか?」って聞いて『らんなさい』って。

そこで、先生に、せつせと「どうですか? どうですか?」って聞いたのね。そしたら、先生が、「お母さん、そんなに焦っちゃダメですよ。長い目で見ましょうね」って言つたんですって。(大笑)

先生自身が、近視眼的に「アレも悪い、コレも悪い」とイラライラしていたわけでしょ。ところが、母親が、先生の指示に忠実に従つて、せつせとやつて、そして、毎日日々、効果を確かめに来る。そこで、先生も気付いたのね。子どもつて、もつと、ゆっくり見て上げるべきだつてことに、それと、これは、母親だけの問題じゃなくて、園でも努力しなきゃならないことじやないかって。その後、先生も、目をかけてくれたらしくて、すくすくおだやかになつたみたい。幼稚園

の先生は、時として、気に入らないところを幾つか見つける

と、それを親に報告して、何とかしなさいと命令して、役目が終ったみたいに思っちゃうでしょ。でも、その人みたいに、「どうでしよう変りましたか？」って催促されると、「ああ、母親は母親で頑張ってるから、私も、園のことは園で頑張らなきゃ」ってことに気付くのね。

先生にイヤなことを言われそなうなので、なるべく近づかないうように逃げ廻る。先生は、是非ともつかまえて、のことだけは報告しなきゃ、って思う。それで悪循環が起ころのね。逃げる→つかまえてイヤなことを言う→くさつて子どもに当る→子どもは、ますます不安定になる。ってわけ。お互にやつていかなきゃならないことなのよね。親と先生と、両方が積極的に、子どもに対してプラスの関心を持つば、子どもってすこく変るものよ。

守永 逃げ歩かないで「先生を上手く利用せよ」ってわけね。それは、人ととの関係に共通でしょう。

野田 本当よ。障害児のお母さんでも、近所隣の人悪口を言わない人の子どもは、大丈夫ね。普通学級でも、大てい、上手くいってるの。

その逆で、悪口や愚痴ばかり言つている人の場合、子ども

が、仲々上手くいかないのね。

つまり、どんなところへ行つてもいい人間関係を作れる人は、子どもを新しい集団に入れたら、そこで、先生や他の父母と、必要な人間関係を作っちゃうのね。

しかも、「皆さんがいい方だから」と思いながら、感謝している。そこで、多少のことは、いやがらず努力する。すると子どもも、安定した場を獲得しやすいのね。

逆は、仲々上手くいかない。子どもの生活しやすい場を作るための基盤が出来なくて、子どもや先生にだけ要求したり、先生も、親に要求や不満ばかり抱いていたら、子どもはやつていけないでしょ。

守永 本当ねえ。悪いのは周囲の人じやなくて、いい人間関係を作れない自分の責任なのね。

野田 私もはじめは、そのへんがよくわからなくてね。「この人は、いい人々に囲まれて運がよかつた」とか、この人は、気の毒だな」とか思つてたの。心底、そう思つたのよ。

守永 あなたつて、心底から人を受け入れるのね。(笑)

野田 でも、やつと気付いたのよ。どこに引越ししても、「悪い人ばかりに囲まれる」のは、結局、その人のとらえ方なんじゃ

ないかって。

守永 何でも、マイナスにしかとらえない。外罰的に、他者に責任を向けてしまは、ってわけね。

野田 そう、自分は一步も出ない。ほんの一部でも、自分を変えたことが出来ないのね。

それにしても、「自分が変る」ってことが、本当に大切なんだって、しみじみ思うの。

守永 私も含めて、「困った子ども、困った親」に悩んでいるつもりの保育者は、反省すべきね。「困った先生」なんじやないか、って。

——お話をうかがっていると、臨床体験の中から、人間の生き方の基本みたいなものが、洞察されていくわけです。子どもの臨床というのが、そういう意味で、根源的な人と人の出会いの場だということでしょうか。

ところで、すべての臨床家が、そういう洞察に到達するのですか。

野田 さあねえ。他の人のことはわからぬから……。

守永 周囲のお仲間の中でも、とてもよくわかり合える人と、余り話の通じない人がいるんでしよう。

野田 そう感じることもあるわ。でも、臨床家ってのは、子どもを規範に合わせようとせず、あるがままを認めるという立場

に立つでしょ。だから、人間の問題の基本的なところが、見えやすいことは確かね。「こうしようこうしよう」って、自分で決めた型を追っかけてるんじゃないから。

障害児なんていつたって、その人として育ってきた生活の基盤があり、人となりがあつて、そのどこか一寸したところが、どこかでゆがんでるだけでしょ。それを直して上げるのに、その人の中から何かを借りるわけよね。その人の育つったものの中から、或いはその人の育つ力の中から、何かを借りて、ゆがみの部分の補い方を工夫するわけよね。そこで、どうしても、人を見つめると言うか、見据えると言うか、そんなことに一生けんめいになるんでしようね。

守永 保育だって、本当は、そうですものね。それが基盤ですね。

——やはり、子どもをみつめることは人間をみつめることのようですね。“保育学事始”は、“人間学事始”でもある、ということでしょうか。

どうも、いろいろとありがとうございました。

—— 14 ——

(記録 執筆 美濃子)
文責 本田 和子

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をお寄せくださいますことを、期待しております。

〔記〕

一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十五年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念縦賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品

最優秀賞一名 賞金三十万円

二等賞 二名 賞金五万円

三等賞 三名 賞金一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合せ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二一一一 お茶の水女子大学附属幼

稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問合せは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

『復刻・幼児の教育』について

『幼児の教育』は、明治三十四年に『婦人と子ども』と題して創刊されて以来、わが国の保育の発展と歩みを共にしてきました。その後今日に至る七十余年の間に、この誌上で発表された記事や論説は、保育理論の先駆的な役割を果たし、幼児教育の進歩に寄与してきました。今回、わが国の幼児教育を概観する好個の原資料として、同誌戦前版を復刻刊行いたします。

『一卷～二〇卷』『婦人と子ども』明治三十四年～大正九年全二〇巻、別巻一、別冊記念論集

〔刊行〕名著刊行会 〔価格〕現金価格 一八六、〇〇〇円
〔申込・問合せ先〕総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一一四七 大森ビル

T E L 東京(〇三)二九五一〇一八六

本 社 大阪市東区今橋一ー一三 藤浪ビル

TEL 大阪(〇六)二三二七一五三四一 (代)

わが幼かりし日の玩具と遊び

酒井 恒

私は鎌倉に住んでいますが、同じ屋敷内に二人の男の子の孫が住んでおり、別に同じ市内にやはり男の子の孫が二人おります。いちばん年上の孫が小学一年生、次が幼稚園、次の二人が来年から幼稚園といふ年頃です。毎土曜・日曜にはどちらかの孫と一緒に遊ぶことになっているので私にとって週末がとても楽しみです。

ところがこの孫たちの玩具がなんと一人当たりだんぼーる箱二杯もあって、その種類も数えきれない程度です。宇宙戦艦大和をはじめとして、ウルトラマン、ラジコン、モンチッチ、ガッチャマン、あらゆる車種のミニカー等等。それらの玩具を次々に座敷中にひろげて遊ぶので、もうこの頃では孫たちとの遊びにはついていけなくなってしましました。それ

にしても当今の子供たちは何とめぐまれて いることかと玩具を見るたびに感じます。

*
＊

私が孫たちと同じ年頃であったのは、遠い明治四十年頃でしたが、その頃私が親から買ってもらつた玩具といつたら、当時の相撲の両横綱の常陸山と梅ヶ谷の瀬戸物で作った人形ぐらいしかなかつたと記憶しています。その人形は色で焼きつけてあってとてもきれいでしたので小学校へいくようになつても手放さずに持つっていました。それはその人形が習字の時間に墨をする時の水入れにもなつていたからです。その二つの人形以外には私の心の通つた玩具は持つていなかつたように思います。

しかしながら私たち田舎の子供の心をとらえていたのは買ってもらつた玩具ではなく、四季を通じて展開する自然、つまり美しい野の花や昆虫や小川に

群れていた小魚たちであったのです。そのような自然の遊び相手で私たちの毎日はとても楽しくて、たんぽで遊んでいて日が暮れる頃になると、どうしておでんとうさまが西に沈んで夜になつてしまふのか残念でたまりませんでした。このような美しい自然の中で遊んでいれば、今の子供たちもきっと買ってもらつた玩具以上に自然に對してよろこびと満足感を抱くようになるのではないかと思います。

私の郷土は神奈川県の西地域の足柄上郡、大井町で、小田原から北へ十キロ位のところです。昔は金田村といいましたが、村の西側を二宮尊徳で有名な酒匂川という清流が流れています。その流域には広々とした、とても美しいたんぽが展開していて、四季を通じての自然環境はすばらしいものでした。今まですっかり都市化してしまい赤や青の屋根が連なつてしまい、何本かのバイパスも走つていて昔の自然のおもかげは見られなくなつてしましました。

冬が過ぎてたんぽの霜柱が消える頃になると鎮守

の森では赤いツバキが満開になりました。ヒヨドリの群が蜜を吸うために集まつてきて鼻先を花粉で黄しくそめて、楽しい叫び声を上げていましたが、私たちが近よつても決して逃げはしませんでした。木の下に一面に落ちている花の中から形のいいものだけを拾つて、ひもに通してすばらしいツバキの首飾りをつくつてみんなで首にかけて楽しみました。それはハワイのブルメリヤやアラマンダで作られた「レイ」に少しも見劣りのしない美しい「レイ」でした。が、ハワイやタヒチの人たちが花の首飾りを楽しんでいることなど田舎の子供たちは知る由もなかつたのですが、その着想は全く同じであったわけです。

夏になるとツバキのレイに代つて更に美しい「ノウゼンカズラ」の橙赤色の花のレイが作られました。そして秋祭りの季節になるとヒガンバナとノギクで花の「みこし」をつくつてみんなでかけ声をかけてかつぎ廻りました。

三月のはじめから咲きはじめたレンゲソウは桜の花の散る頃になると深紅の絨毯となつて田圃一面を色どりました。農家の人は伦ヶソウとは呼ばないでモウセングサと呼んでいました。私たちもやはりモンセンと呼んでいて、その毛氈の上に寝そべつて、青空のヒバリの声をききながら、鳴き声を真似ました。

今でもじつと目を閉じているとその頃のレンゲソウの甘い花粉の香りと、蜜を吸いに集まつてきたミツバチの翅のひびきが頭の奥によみがえつてきました。

レンゲソウの生えていない田の面には一面に「ズメノテッポウ」がまるで種を播いたように生えていて、細い筆の先のような穂が出揃つっていました。農家の人はこの草を「ピーピグサ」と呼んでいました。そのピーピグサの先の方の一節をつみつて、穂を抜きすてて、先端の一枚の葉を逆に根元に向けて曲げ、唇にはさんで吹くと調子の高い草笛

になります。この草笛は誰が吹いても、どの茎をとっても、笛の音色は同じピーピーでした。

同じような草笛はタンポポの茎でも麦の穂の茎でもつくりました。タンポポの花茎を四センチ位に切りとつて、根元の方を口にくわえて、前歯と舌の先で数回軽く咬むともう立派な笛が出来上ります。麦の穂を一本抜きとつて、その軟かい茎の部分をやはり四センチ位の長さに切つて根元の方をくわえて、歯と舌の先で軽く数回咬みます。これもよく鳴る笛ができ上ります。タンポポや麦の穂からつくった笛は太さと長さをいろいろに変えると笛の音色や調子がさまざまに変ることを私たちは知っていました。そうして、いろいろな笛でリズムをつくりながらの子供吹奏楽団をつくったことも楽しい思い出となっています。

*

酒匂川の土手には老松もありましたが小松も洪水を防ぐためにたくさん植えてありました。松の木は葉が痛くて木登りなどできませんでしたが、それでも松葉や松の新芽を使っての遊びはいろいろ工夫されていました。小松の枝を注意して眺めていると枝に何本かの松葉が、どうしたことか先が釣針のように曲っています。そのような曲り松葉を探し集めて数を競い合いましたが、それを使っていろいろな作品をつくることもまた楽しい遊びでした。釣針のよう曲った部分をひっかけ合わせて長い鎖もつくりました。農家の熊手をまねて曲り松葉の熊手もつくりましたが、これなどは今考えると正に幼児制作の民芸品といった価値があったように思っています。

四月の終り頃になると松の新芽が長くのびてきます。この新芽のことを松のみどりと呼びますが、その先端にきれいな紫色の雌花が数個ずつついています。これが成長すると「まつばづくり」になるとい

う私たちの観察は正しいものでありました。その小さい雌花は夏の終り頃にはもうかなり大きい緑色の固い松の果実に成長し、それが翌年の秋には実を散らして「まつぼっくり」になつて落ちることも承知していました。

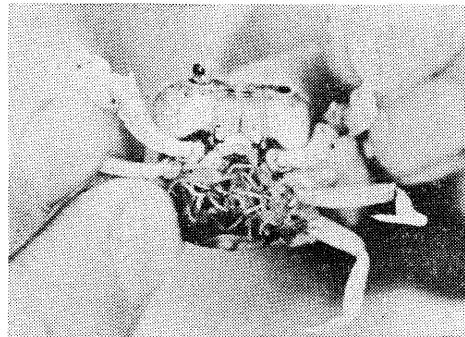
松のみどりを折ると透明のねばり強い松脂ヤニがあふれます。その松脂は私たちのつくる笹舟の動力源となりました。笹舟は「マダケ」の葉は小さいので、笹竹の大きい葉でつくりました。笹の葉を前端と後端を折り返して手際よく舟をつくり上げ、その舟尾に松脂をぬります。そうして池の面に浮べると笹舟は、松脂が水とけてひるがる反動で走り出します。笹舟がいかにまっすぐに、滑かに池の面を走つていくかは舟尾につける松脂のつけ方によるもので、そのつけ方は子供心にもいろいろと工夫をこらしたもののです。

*
私たちもいろいろな魚の名前を知つていきましたが、名前ばかりでなくその生息状態をも経験にもとづいて覚えていました。フナやドジョウは水の暖かい所でないといないし、ハヤやモロコは流れの早い

酒匂川という川は平素は清い河原にすんだ水が流れています。四季を通じて今日でもゆらゆらと陽炎かげろうが立ちのぼっていますが、一旦暴風雨が襲つてくると忽ちにして濁流だくりゅうがさかまき、そのために昔から何度も堤防が決壊してたんぼを荒廃させました。その荒廃が対岸の桜井村（現在は小田原市）では二宮尊徳を生み、私の村にも洪水の残物として土砂の山や、大小の水たまりやそれらを結ぶ溝や小川が残されました。これらの水域には他に例を見ない程に豊富な淡水魚やエビ、カニなどを産するようになりました。ですから水ぬるむ頃から夏へかけての私たちの魅力はたんぽへいって、こうした水の動物たちと遊ぶことになりました。

水の冷たい所でないといなすことなども知つていませんでした。

そして私にとっては生涯かけての研究テーマとなつたカニとおここのたんぼで最初に触れ合うようになりました。このたんぼにいたのはサワガニと形の



夏の終りになるとサワガニのめすは、
たくさん子ガニを抱いていました。

大きいモクズガニの二種類でしたが、いつもかわいがつて飼っていたのは、赤や青や白など色の変異に富んでいたサワガニでした。モクズガニは大きくてはさみに毛が生えていて恐ろしいので、触れることはありませんでした。サワガニを飼つておいて特に興味を感じていたのは、餌をたべる時に両方のはさみを器用に使って、私共と同じように行儀よく食事をすることでした。海岸へ行つたこともなく、海から遠く離れた田舎に住んでいた私は海のカニなどは一度も見たことはありませんでした。

(一九七九・三・五)

一年保育のよさを見つめる

なかで

——生活の基本をふりかえる——

柴 田 い つ



私は、本園に着任するまで一年保育の五歳児との接触ばかりであった。昨年四月初めて二年保育を実施の幼稚園に転任し、あらためて幼児を見直す機会に恵まれた。といっても基本的には変わらないのであるが、四歳児の幼児に接することにより、「幼児」の純真さ・素直さ・そして徐々にではあるが、顕著な変容に接し幼児の発達というものを実際に見る思ひがした。

た段階から、自分の体から離せるようになり、やっと、あそぶようになつていく変化を目の前に見て、うす皮をはぐように、お母さんのぬくもりから離れ、外気のきびしさに向つていこうとする力、つまり、幼児自身の力で、「自立していく姿」を見たよう思った。

今更ここに、こと新しく記すまでもない自明の事かもしれないが、異年齢集団のよさを身にしみて感じている。このような意味から、私はここに、四歳児、五歳児それが育つていく成長の姿を追いながらその跡を確かめて

入園後、泣き叫んでいた「H」の徐々にひとり立ちしていくようすや、人形を、ボールをじーっと抱きかかえてい

いきたい。

(1) 四歳児としての身についていくもの

四歳児はまず、"自分の身のまわりのことがひとりで処理できるということ"と、多くの友達と一緒に"動ける"——(あそぶ以前のこと)——ということが、入園当初の幼児たちにとっての課題である。そして、それは、園生活の基本となっていると言える。でも、なんといっても個人差の甚だしい時期なので、ひとりひとりの児童への配慮は、かせない教師の務めである。この教師の苦みは、五歳児への対処とは格段の開きがある。"ひとりひとりへのかわり"がこれほど、綿密に、そして確実になされなければ、入園当初の指導は成立たないのである。いうまでもなく、多くの仲間と一緒に話を聞くことは、はなから無理な児童である。そこで、ひとりひとりの児童の動きを的確に見詰めながら、教師の働きかけをどのように児童が受けとめ、どこまで自分の身体を感じているのか、児童の目の動き、表情、その他の反応から擋まなければならない。

服をたたむ、靴を揃えるバステルの入れ方、マジックのふたの始末、ごみを捨う、手洗い、蛇口のしめ方などについても、ひとりひとりの児童の理解のしかたがちがう。

だから児童たちのやり方を見とどけ、その子に合ったことばかり、つまり、その子の成熟度に見合った中味の言葉かけをしなければならない。そして、ひとりできれない児児には、教師がその実際を示しながら、やってみなければ、本当の指導ができない。しかしながら、丸ごと面倒をみるのではいけない。やれると思われる、または、やってみようという気持を起させる余地を残しておく配慮もまた、大切である。いずれにしても、励まし、ほめながら気永じつくり見守り、中途半端に終ることなくきちんと見とどけることが大切であると、つくづく感じたのである。

このように、児童に対して行けば、基礎的なしつけとともに、指導は、生活習慣指導の場というよう構えなくてはならない。一日の生活のいくつかの経験の場において教師と児童とのかかわりのなかで自然に身についていくと思われるのも、児童の個々の経験の場において教師と児童とのかかわりのなかで自然に身についていくと思われる。そして、何よりも、教師自身のゆったりとした気持の落ち着きと、寛容さ、そしてそれらのことから、教師の全体に溢れ出てくる暖かさとなり、きりっとした指導も可能となる。行き届いた指導は、その重要性の認識からだけではなく、教師のひとつひとつの言葉やその時の態度は、このような教師の振舞によってすなおを四歳児にしみ

込んでいくように思われるのである。

身のまわりのことの処理や対処に自信がついてきたころ、あそびの面でも、ひとり遊びから、一人、三人と友達を意識し、かかわり合いを持つて遊べるようになつてくる。粘土、ブロック、ままごと、砂あそび……と自分の表現したいことをたのしくおしゃべりをしながら何かの形を借りて表現したり、そのものになり切つてたのしむことをしたりするようになる。この時の幼児の姿はほほえましい。

また、それと併行して、真剣に友達の事を考えてあげたり、喜んであげられる素直さややさしさの感情の芽生えも育っていく。水槽の中で暑さにのびてしまつた蛙をみて、「なぜひいてるの?」と心配そうにのぞき込んだり、モンチッチの人形の額に、小さくたたんだハンカチをのせ、熱があるから静かにしてねと頼んだり、引っ越していく友達に、「かわいそう」と不安気に見送つたり、けがをして、綱帯をしてきた友達に、「がんばれよ」と励ましたりする。率直に自分の気持を相手の中に投影して考えられる、つまり、共感できるようになつてくる。

さらに、物を整頓するという基本も、四歳で身につけさ

せていきたい。「させる」という表現は、押しつけていくようなニュアンスがあるけれども、私自身これまで、梓にはめてしまつといった印象で、反撥もしてきたが、目の前の四歳児の姿をみてやはりこの時期に身につけさせてやりたい大切な内容だと思った。つみきの厚さ、薄さ、大小の形等知つていくうちに、平面に横に並べて続けていくことや、二段、三段と高く積み重ねて遊べるようになる頃から、ボックスの中へも、同じ形のつみきを選んできらんと収めることができるようになつてくる。もちろん、教師も一緒に片付けながら、幼児に語りかけ、或はひとりごとを言いながらの教師の誘導は重要な働きかけと思われる。そして、きれいにかたづいた時、又或いは、大、小、厚さのちがう絵本の区別、ままごとの戸棚の整頓ができるとき、「あ、さうぱりした」という気持の爽快さを幼児とともに、教師も味わつていくことが大切であると思う。

かくして、園のリズムが四歳児に理解されていく頃、みんなで一緒にする活動の時、友達を“待つてあげる”といふことも出来るようになつてくる。手洗い、おべんとう、かたづけ、おはなしを聞く、帰りのあいさつ……等の中でも、「順番」とか「待つ」「自分勝手なことをしない」とい

う基本的な“きまり”を毎日毎日のくり返しの中で幼児たちは、体で覚えていく。このことは、ものごとのけじめを理解していく基礎になっていくように思われる。

(2) 年長児としての自覚

このようにして、四歳児の段階をへた五歳児は、園生活の基本としての必要ないくつかの習慣が身についている。だから、四月当初より、すべてに自信をもって行動できるし、年長になったという自覚がさらに、彼等の行動を立派にし、園の主軸になつて経験を重ね、望ましい活動をしていくと言える。新しく迎え入れた年少児への思いやりや、一緒に遊んであげるなかで、遊具の扱い方、遊び方、約束事など、年長より年少への子どもらしい伝え方、示し方で教えて行く。年少児もそれを素直に受け入れ、理解度も早く、遊びの中で定着していく。このようすは、同年齢ばかりの幼児ではみられないことである。

現在当園の幼児たちは、年長児を二分し、一年保育児(フェンスひとつ距てた保育園よりの入園児)との混合のクラスであるが、二年目の幼児のリードで友達関係もしっかり樹立される。このことは、やはり、四歳児時代の経験が可能とするのであろう。つまり、二年目の幼児は、戸惑

うことなく、安定感を持つて園の総ての物事に対処できるからであろう。つまり、彼等は“自信”を持っているのである。そして、彼等は、意欲や根気の点からみても、途中で放り出すことなく、挑戦意欲が旺んで、幼児らしい発想やアイデアもみられる。

なお、当園は、同一地区に保・幼・小・中とあり、同和地区をかかえ、同和教育の精神にのつとつて保育され、幼児のよさ、特徴を生かしながら成長していく。そして、幼稚園でのメンバーそのまま中学校まで生活をともにするわけで、文字どおり、一貫教育の実践地区といえる。保・幼・小・中の四者合同研修会も持たれているが、ここでも、やはり、基本的生活習慣涵養の大切さが話し合われている。

そして、家庭ならびに子どもをとりまくまわりの社会をもひつくるめての理解と実践の大切さはいうまでもない。

なにはともあれ、次の時代を背負う幼児たちのために、今後も何が大切か、何を育てていけばよいかをみきわめ、実践していくなければならない。

(四日市市立保々幼稚園)

私の保育

——一日一日をふりかえりながら——

向山陽子

三月——又、区切りの時がきました。子ども達と私との一日一日の積み重ねの生活が、終わりになり、子ども達が卒園していく日が近づいてきました。

この頃になるときまつて子ども達の入園してすぐの頃を思い出すのが不思議です。

「別れ」の時には、「出合い」を思い出すのでしょうか……。

◎ 今日のこど

私は、去年も年長児を担任し、今年も再び、年長組・まつ組三十二名を担任しています。

暖かい朝です。登園後、朝の用意（うがいをして、コップとタオルをかけ、弁当を暖飯器に入れて、かばんをロッカーへかけ

る）をすませて、身体測定をしました。外国へいっている二人を除いて全員出席です。測定を終えた子ども達は、外へとび出していきました。全員を測り終えた頃には、リズム室と保育室には、

積木で間取りをした、広い家が二軒（女子十名、男子三名）。ジャングル・ジムには、三日前から始めた、ござ屋根、積木の板の床や壁のあるマンション。（男子八名、女子一名）U子は他の人の食事をつくる人だそうです。）雲梯には、縞柄のビニールをかけて、レストラン（男子三名）。その近くのピューム管では男子六名女子一名が、お金をつくっています。どうやら、レストランの開店を待っているようです。

それぞれの“家”を基地にして、交流がはじまりました。山のすべり台に、ロープを結んで、ロック・クライミングに出かける

もの。砂あそびに出かけるもの。マンションから車で出かけ、途中、雲梯のレストランで、食事をとるもの。二階のリズム室の家からは、ジャングル・ジムのマシンシヨンづくりに必要な、大積木の板を運び出し、大工さんきどりで、「出張販売及び、とりつけ」をしていくもの……。

都心の幼稚園としては、広い敷地を持つ園中を使って、いくつのかのじっこ遊びが、つながっていきました。

私は、保育室の「家」のベランダで、T子、M子、F子と粘土板や、ままごと道具を洗っています。卒園にむけての大そうじの一環として、家ごっこを利用させてもらっているのです。卒園間近い一日、私の手助けを必要とせずに、クラスの和ができ、一人一人の満足が、広がっていくのが、感じられます。

「先生！ 食べにきて！」レストランから、声がかかります。

「先生！ 見て！」砂場から、年中組とつないだ大きな川を誇る声がします。

「先生！ 呼び鈴はこれだよ。遊びにきていいよ！」

ついこの前まで、トラブルがおこると「先生！」必要なものがあると「先生！」だったのに、今日は、お客様としてしか、私の存在を必要してくれません。嬉しいような、居場所がなくて寂しいような気もちです。

今日は、卒園記念にと思って全員がつくった紙版画「顔」の印刷と、模造紙の上に子ども達を踊らせ、ストップをかけて、等身大の型をとることを計画していましたが、遊びにストップをかけて、私の側の計画を入れる気にはなれない、いい一日です。

さくら組（年中組）が、シユーメーカーズダンスとタタロチカを踊り出しました。園中に、リズミカルな曲が流れ、それを、きつけたM子たちが踊りの輪の中へ入ってきました。

居場所のなかつた私もこれ幸いとばかりに踊り出しました。年中児と年長児、年少児も踊ります。二十数名に踊りの輪は広がりました。何度もくり返し踊ります。ペティケーク・ボルカを年中児に教えてあげる年長児達、とても幸せな眺めでした。

◎ 子ども達に教えられて

去年の今頃の私は、残された日数で残された課題（あの子には、こうなつてほしい、この子には、この点を身につけて卒園させたい。etc）に、毎日を追われていたように思い出します。このような姿勢で臨む限り、成長している子ども達の課題にばかり目がいき、成果も上がらなかつたようです。

去年と比べると、今年の私は、子どもの成長を喜んでおり、楽しく毎日を送っています。もちろん、子ども達一人一人の次への

成長の課題はあります。

でも、それだけに追われず彼らの成長を喜べるのは、最近になって、子ども達に教えられた数々のことが、私に大きく影響しているようです。

。 H君のこと

三学期になつて、H君がゆつたりと、彼の良さを、發揮できています。二学期後半、受験と父親の入院が重なり、幼い彼には、重すぎる負担がかかっているようでした。私と二人きり

で、遊ぶと、子どもらしい発想の、やさしいH君なのに、お友達を泣かせたり、けんかをしたり、彼のよさをひきだせないでいました。

冬休みに、私自身が、彼の良き理解者ではなかつたと反省しました。実際に、彼にむかう時の私は、叱る顔の方が多かつたのではないかと気づいたのです。

私にとって、長期の休みは、有難いもので、綿々と続く日々の保育に、空白期間を作ってくれます。連續する毎日には気づかなかつたことに気づかせててくれます。

三学期は、子ども達に、とりわけ、H君に、叱らないで、保

育することを目標にしました。

休みがあけて、すぐの半日保育の日の事です。半日保育の日は、遊びをきり上げられずに、片づけにまで、遊び続けることがあります。その日、帰る用意ができる後でH君が戻ってきたのです。

今までの私なら「遊んでいて遅れた」とうけとめたでしょう。でも、その日の私は、H君は最後まで、片づけてきたから遅れたと、うけとめる事が、できたのです。彼にいうと、「ウン、だつて、皆、先にいつちやうんだもん。」と顔を輝かせました。

私は、H君としつかりと、つながつた事を確信しました。
翌日から、彼は『エルマーのぼうけん』の地図を、じっくりと描き出しました。

家庭状況もおちついたのでじょう。友達とのトラブルも減つてしましました。

保育者の見方一つで、子どもの長所を引き出せることを、身をもって知ると同時に、逆も成り立つ訳で、心をひきしめました。

Y君は、まつ組の生き字引きです。鳥、魚、動物etc.の事をよ

。 H君とY君のこと

く知っています。

反面、運動が苦手で、サッカーや、活発な「遊び」に入つても、いつの間にか、ぬけてしまつたり、仲間入りができずに、近くでウロウロとしています。

私が、手助けしようとすると、「いいんだよ。僕、入りたくないんだよ。」と、こまかしてしまいます。

H君と、S君が、雲梯の下で、レストランをはじめました。

白砂は塙、黒砂は、しょうゆ、混せた砂はこしょうにして、楽しそうです。そこへY君がきました。S君とY君は降園後、よく一緒に遊びます。Y君は、S君がいるので入つたつもりになつて、います。そんなY君に、

H 「お前は入つていないぞ!!」

Y、何を言われたかわからず、ニコニコ。

H 「仲間じゃないだらう。俺達のレストランだからな。」

Y、H君の言葉の意味がわかりません。

私 「H! いじわるだナ……」

H 「だめだよ!!」

Y、パンと怒つて出でいく。

私 「Y!! 待ちなさい！」

Y 「ぼくい込んだもん、入りたくないんだもん。」無理をして

いる顔です。

私 「Y!! こまかすのはやめなさい。どうして、もっと入りたいんだって言わないの!!」

Y、もどる。黙つて又、雲梯の下に入る。

H 「やめるよな!!」とYを押し出す。

H、自分の言動の本当の意味が通じていないと気がつきあわてて、

Y、「『入れて』つていわないんだもん、『入れて』つていえばいいんだよ。」

Y、今さら言えるか！ とばかりにブーッと怒る。

私 「裕!!」

Y、小さな声で「入れて」

H 快く、「いいよ」

Yは、こぼれそうな笑顔で、仲間に入りました。言葉が足りなくて、誤解されやすいH君。本当は、ルールを守つただけの、やさしい人なのですね。

「入れて」の一言が、こんなに大切な言葉だなんて、Y君もよくわかりましたね。

私も教えられました。

○ A君に教えられた「待つこと」

当園には、年長児対象の体育正課があります。週に一回、男の先生に、体育あそびの指導をうけるのです。

その日は、ボールあそび。準備体操の時に、C君と、R君がけんかをはじめました。早く流れにもどそうと、私の気持ちは動きました。見学のA君が、仲裁に入りました。“見学の人は、見ていいなくてはいけない”又、私の気もちは動きました。今にもとびだして注意しそうになる自分を、必死でおさえました。

A君の仲裁は、忍耐強く、何度も互いの意見をきき、原因がボールのとりあいだとわかると、別のボールを探しにいくのです。C君も、R君も、A君に心を許し、パートボールがはじまつた時には二人とも笑顔で参加していました。

私が口出したのでは、きっと無理矢理流れにおしこめていたでしょう。

子ども達の成長に感激しながら、子どもの成長を信じて、黙つて待つという事を教えられました。

気がぬうちに、無用な言葉を、どんなに多く、発しているか、恐しくなると同時に、黙つて待つ事が、いかに難かしいかも知りました。

○ おわかれ発表会

当園では、年長組だけが、発表会を行ないます。日常の保育の総まとめとして、子ども達の負担にならない、楽しいものにしようと毎年話されますが、その実現は、大変難しいものです。

型を教師がきめて、子どもをその中に入れるか、子どもの発想を生かして、つくるか……。去年は、前者だったので、今年は、難しい後者に挑戦してみました。

題材は、二学期に読んで皆が大好きな『ももいろのキリン』にしました。紙でキリカや、動物達をつくり、職員室の窓に、はつたこともあり、照れ屋の多いまつ組にはペーパーサートがいいと思いました。

はげちょろけの動物達とキリカがクレヨン山へいって、オレンジぐまをやつつけ、クレヨンで、きれいになる場面を中心には、前後は、何人かの“るるこ”が、語ることになりました。私が作った骨組みに、子ども達は、次々とアイデアを出してくれます。

・題は「キリカのおはなし」にして、看板を、るるこ達が、首から下げて出てくる事。
・ペープサートを持って、這つて出てきたへびのT君。
・クレヨン山へいく時のうたを考えたK君。

・オレンジぐまをひもで引いて、とぼす事。

・最後にいるのが「ハイ」「お」「し」「あ」「し」と背中につけて、皆の声にあわせて、クルッ、クルッと、後をむくことetc. クレヨンの木や、ペーパーサートも、全員の力で出来上りました。

子ども達はのりにのっているけれど、私は内心の葛藤の連続

でした。期間を充分にとれば、もうともうと煮つまたでしょう。春のような暖かな毎日なのに、練習だけに縛りつけたくないし、でも、見せるための劇としては、今一つ、整然としていることが気になるし……。

「他と比べず、自分の成長を喜べる人に!!」いつも、子ども達に願っている事が、私自身の課題になりました。

本番が終わっても、出来映えを他と比べているのは私でした。御父兄は、子どもらしいアイデアを喜んで下さったし、子ども達は、本番の後、春の庭で、砂や、土に接して「しつとり」と、睦まじくの言葉が似あう姿で遊びこんでいました。

今年できなかつた部分は、来年度の保育の課題として、しっかりと心に記し、まだまだですが、去年よりは、一人一人を大切にできたという私自身の成長を、しっかりと見つめたいと思っています。

今、思い出しても、ホッと胸をなでおろすのは、I子のことです。活発で、利発なI子は、希望で、クレヨンやへびになりました。そのI子が「何が何だかわからない。」といい出したのです。心にかかりながら日は過ぎていきました。本番の二日前の朝、駅のホームで気がつきました。「I子は、るるこになりたいのでは……」

お弁当の時、I子は、「キリカのおはなし」をはじめから暗唱しています。「I子、るるこになつてもいいわよ。」というと、I子は、見る見る輝いてきました。I子は自分でせりふを考え、すでに決まっていた四人のること自主練習をはじめたのです。当日、I子の元気のいい声にホッとした私でした。

”せんせい”になって、六年がすぎようとしています。

「子どもに教えられながら、教師も成長していくこと」

「父兄と理解しあい、支えられてこそ、いい保育ができる」とが、おぼろげながらやっと実体験でわかりはじめた私です。

私の保育のためにはじめた「週毎の六領域の点検表」と、「日案と記録」を、私自身の成長の記録として、一日一日をしていねいにふり返りながら記し続けたいと思います。（東京・大和郷幼稚園）

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その九）

海老沢敏

七、《ルソーの新ロマンス》と 《ルソーの夢》を比較する

前章で私はルソーの『村の占師』中の器楽曲『バントミム』の冒頭旋律とイギリス歌曲『メリッサ』ならびにフランス語歌曲『ルソーの新ロマンス』の比較考察をおこない、二つの歌曲が『バントミム』から導き出されたものの、その編曲がルソーとは直接関係はない、またその様式もすでに非ルソー化していることを結論づけたものであった。

それでは『ルソーの新ロマンス』や『メリッサ』とクラーマーのピアノ変奏曲『ルソーの夢』の主題との関連はどうであろうか。すでに紹介したように、『グローヴ音楽辞典』の初版ならびに第二版では『ルソーの夢』が十九世紀初期に英国で大いに流行

した曲^{ニア}であり、このタイトルではこのクラーマーの主題と変奏曲ではじめて登場するものと推定している。そしてその四半世紀前に『メリッサ』のタイトルで、『まことにわざかな変化を伴なつて』見出されると考えている。だが第五版にいたると記述はかなり訂正されて、まず『ルソーの夢』は十九世紀初期に英国で大いに人気があつた曲^{ニア}であつて讃美歌として用いられ、それにもとづいてクラーマーが変奏曲を書いたという経緯を述べるとともに、先立つ異稿『メリッサ』には言及しないで、この曲がルソーのさる舞曲の变形だと指摘するに留まっている。

私は、以下、本章において、音楽的分析ならびに資料探索の両面から、こうした問題、とりわけ、ルソーの『バントミム』、『ルソーの新ロマンス』ならびに『メリッサ』、そして『ルソーの夢』の関係についても、私独自の結論を導き出し、従来流布している

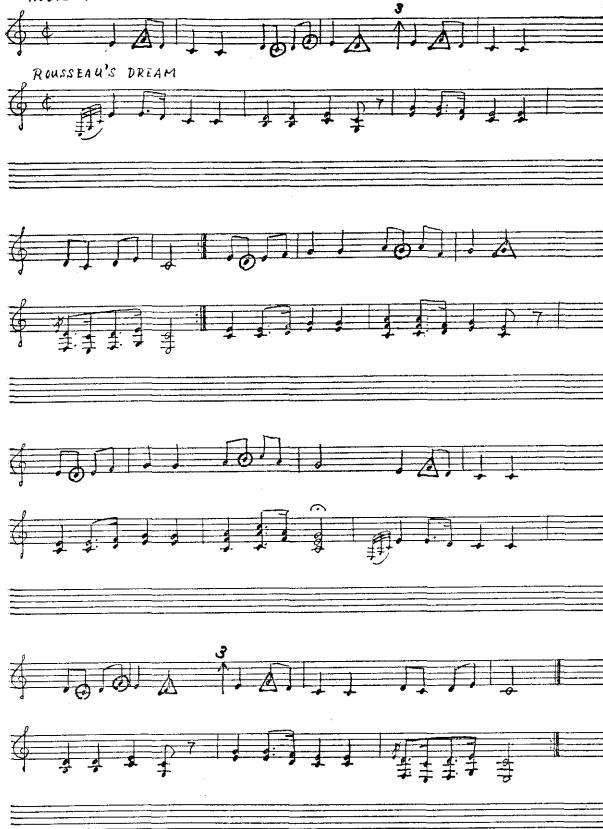
▼ 譜例 ①

△ 変更

○ 省略

↑ 3度移動

NOUVELLE ROMANCE DE J. J. ROUSSEAU



示されている。

説に対して論駁と修正とを試みることにしたい。

まず、譜例①を見てみよう。この譜例は上段に『ルソーの夢』を対置したものである。ト長マンス》を、下段に『ルソーの夢』を対置したのである。ト長調の前者、ハ長調の後者とともにハ長調に移調してある。こ

のように対比させてみると、ただちにいくつかの特徴が目につくことだろう。第一点は、『新ロマンス』の音の動きが変えられることである。△印はそうした変化を蒙った音を原曲としていることである。△印は(ミー・ドー)と段落感、終止感をつよめていることがそれである。さらに第二点は、『新ロマンス』の音の動きが省略されて、旋律の単純化が押し進められていること。これは○印で示されている。

ドー・ドー>が(ミー・ミー・レ)。

ドー・ドー>と、音の動きが均されていることがひとつ、それでもうひとつは(ミー・ドー)が(ミー・ドー)、あるいは(フー・ソー・ソー)が(ソー・ミー)と段落感、終止感をつよめていることがそれである。

同じ音の動きがくりかえされるとき、それが三度上でおこなわれることである。これは(3↑)で示されている。

以上の相異に加えて、『ルソーの夢』にはなおいくつか目立つた点がみられる。第一に、旋律冒頭、ならびに第二部でのその反復の際に、アルベッジョ、すなわち主和音の分散音が装飾的に添えられていること。第二にその冒頭の個所は別として、あとの部分は三度や、三度と六度音程の和音が下に加えられていること。さらに前、後兩楽節をしめくくる六度音程の動きの冒頭には前打音がつけられ、またBの部分を閉じる主和音にはフェルマーラ記号がつけられていること。さらに全体を通じて、『新ロマンス』の八分音符の動きは付点つきのリズムに変えられていること。

こうした両曲を比較しての相異点を勘案してみると、『ルソーの夢』の旋律が、きわめて器楽的に処理され、とりわけピアノ的であることが理解されるだろう。ただしピアノ的といつても、いわゆるヴァーチュオーソン風という意味ではもちろんない。冒頭に添えられたアルペッジョ、冒頭音形が反復される時の三度上への移行、リズミックな付点音符などすでに述べた点がそれである。こうしてこの旋律は、クラーマーの曲では、やがてそれに変奏曲にふさわしい変容が加えられるという意味で、そうした処理が可能な変奏主題的性格を、すなわちエラスティックな、可塑的な性格を打ち出しているのである。

しかも『新ロマンス』との比較対照は、たとえばフェルマーラ

に終止する直前の音の動き「ラ・ドー・ラ・ソーヴ」が、『新ロマンス』の対応部分「ラ・シ・ド・ラ・ソーヴ」の「シ」を省略して導かれたものであることを明らかに示してくれているだけに、こうした考察からは次の結論が必然的に得られるんだろう。すなわち『ルソーの夢』は、ほかならぬクラーマーが『新ロマンス』を下敷きにして、わずかに必要な変更が加えることで、自分の変奏曲創作に適した、つまりピアノ用の変奏主題を案出したものと考えられるのである。すなわちクラーマーは当時巷間に流布し、ひろく愛唱されていた歌曲としての『ルソーの夢』を変奏曲の主題として取り上げたのではなく、みずからこの『ルソーの夢』の旋律形を創り出したのである。

資料的な面で、こうした結論を支持してくれるのは、『ルソーの夢』の題名をもち、またこの旋律で歌われた歌曲の存在が、筆写譜のかたちでもまた印刷譜（いわゆるシート・ミュージック）のかたちでも現存していないという事実である。

こう考える時、『グローヴ音楽辞典』第五版の記述、すなわち十九世紀初期に英國で大いに人気のあった曲が、讚美歌の節として用いられ、それがもとになつてクラーマーが変奏曲を書いたという説は否定されるのである。

クラーマーがみずから『ルソーの夢』の旋律を書いた時、彼が

モデルとし、下敷としたのは、彼が幼なくして移住し、そして定住したロンドンで印刷刊行された英語歌曲『メリッサ』ではなかつたかという疑問がただちに私たちの念頭に浮かんでくることだらう。もちろん、クラーマーはこの『メリッサ』についてもその存在を知つていて、またこの曲が英國で歌われていたのを聴いたであらう。しかしながら、この『ルソーの夢』の直接の下敷、モデルはほかならぬ『ルソーの新ロマンス』であろうと私が推定するのは、次の二つの理由からである。

第一に『ルソーの夢』という標題そのものである。『新ロマンス』は、すでに前章で紹介したように、至福の島キュテラで、恋する男が夢によって、夢の神によって、恋する女性のかたわらにみちびかれ、相抱きあつたが、嫉妬深い愛の神によつて、その幻をかき消され、目覚めてしまい、愛する女性の姿は恋する男の心中にしか残つていないと知るや、恋する女性に対して、愛の神を説得して自分に、ひと夜、真実の時を与えてくれるように切願するという内容をもつてゐる。

この夢の神とは夢の中で人に人間の姿を見せてくれる、あの大きな翼で音もなく飛翔するというモルペウスのことであらうか。いずれにしても、この内容が、クラーマーが名づけたであらう『ルソーの夢』のタイトルと密接なつながりを有していることは

否定できないであらう。一方の『メリッサ』のテキストは愛する人が去つた嘆きをひたすら歌うもので夢や夢の神とはいさきかの関係ももつてない。

第二に音楽上の分析からすれば、フェルマータを前にしての音の動きは、『ルソーの夢』はすでにのべたように『ラ・・ドー・ラ・・ソーン』であり、『新ロマンス』の『ラ・シ・ド・ラ・・ソーン』の動きとはつよい相似点を示している。これに対しても『メリッサ』の当該箇所は『ラ・・ソ・・ラ・・フ・・ソーン』の動きをもつてゐる。

これは強いて関係づければ『ルソーの夢』の内声の動き『ファ・・ラ・・・フ・・ア・・ミーン』と旋律線『ラ・・ドー・ラ・・ソーン』(傍点)であるが、クラーマーがこの『メリッサ』の旋律からだけ、この個所の旋律の動きを導き出したとは考えにくることはたしかであらう。

あるいは一步譲るとしても、クラーマーは『ルソーの新ロマンス』と『メリッサ』の歌曲のいづれをも知つており、『新ロマンス』の歌詞ならびに旋律形を中心にして、彼自身の『ルソーの夢』の旋律を創作したといふべきであらうか。

クラーマーはロンドンを音楽活動の本拠地としていたが、くりかえし大陸に渡つて演奏活動をくりひろげており、最初の旅行(一七八八年——九一年)ではパリを訪れてゐる。この時期に、

ルソーの『村の占師』はオペラ座においてかなりの回数上演されており（一七八七年—八九年に合計二十一回、一七九一年に五回）、クラーマーがその上演に立ち会った可能性もないわけではない。したがってクラーマーがルソーの原作を知っていたこと、その原作の中に『パントミム』が含まれていたことを知っていたことは十分考えられる。しかし、以上の資料研究や音楽分析によつてクラーマーが『ルソーの夢』の作者であることがほぼ明らかとなつたため、ルソーの『パントミム』とクラーマーの『ルソーの夢』は次のような関係にあることが了解されるのである。

すなわち私たちには『むすんでひらいて』の旋律として親しまれている旋律の原形である『ルソーの夢』は、『ルソーの新ロマンス』（ないしそれとの関連において『メリッサ』）にもとづいて、クラーマーが作り出したものである。『新ロマンス』はルソーの『パントミム』にもとづいてはいるものの、ルソー自身による編作ではなく、他人の手によって真正なルソーの歌曲様式とはまったく異なる様式の歌曲に生まれ変わったものである。とすれば『ルソーの夢』はルソーのオリジナルから一段階へだたつたものであり、ルソーとは直接にはまったく関係のない後代の所産として位置づけられる。したがって、あえてルソーと関係づける必要はない、いわんや『ルソー作曲』とするのは明らかにあやまりである。

が、もしこうした間接的なつながりを重視するならば、『ルソー原曲、クラーマー編作』ないし『ルソー原曲、クラーマー作曲』とすべきであろう。さらに厳密には、『ルソー原曲による無名氏の新ロマンスにもとづいてJ・B・クラーマーが作曲した変奏曲主題』というべきであろうか。

八、讃美歌としての『ルソーの夢』

ふたたび『グローヴ音楽辞典』の記述に立ち戻つてみよう。すでに前章で述べたような理由から、『ルソーの夢』の旋律がまず讃美歌の節として用いられた上で、クラーマーの主題となつたといいう第五版の説明は否定されたのであるが、それでは第二版にみられるフランツによる補足（第四章の末尾参照）についてはどうであるか。そこには次のように記されていたのである。「はじめて讃美歌に改作されたのはトマス・ウォーカーの『リボン博士の讃美歌集続篇』（一八二五年）においてであると思われるが、この節は『聖^{セイクラック}歌^{ソロディック}集』（一八四三年）で『ルソー』の名がつけられて出てきたあと、讃美歌の節としてひろく流行するようになつたものである。」

この記述もかならずしも正確なものではない。クラーマーの

WALKER'S COMPANION

Dr. Rippon's Tune Book;
 BEING A COLLECTION OF ABOVE TWO HUNDRED AND EIGHTY
 Favourite and Original
HYMN TUNES AND PIECES.
(None of which are in his Selections.)
 IN SIXTY-TWO MEASURES,
 ADAPTED TO, AND FIGURED FOR THE ORGAN, PIANO FORTE, &c.
TO WHICH IS PREPENDED,
 AN ARRANGED INDEX OF THE TUNES,
EXHIBITED AT ONE VIEW,
 Suitable Hymns to such Peculiar Melodies as are in Dr. Watts, Rippon, Collyer, Lady Huntingdon, and Mr. Wesley's Hymn Books.
 FOURTH EDITION, WITH SUPPLEMENTS.

Printed for and Sold by T. Walker, 21, Red Lion Street, Spitalfields;
 Sold also by Sedgwick & Co., Paternoster-Row; Sirreich & MacLean, 4, Stationers Court, Grays Inn; Balaquide Street; Fawcett Low
 & Poynton, 32, Gracechurch Street; Paston, 97, & Faversham, 87, Strand, &c. &c.
 Price, including both Supplements, Half Bound, 6s. 6d.—Case, 11s. 6d. or complete Paper-bound, 12s. 6d. Rebind/Paper may be had
 bound in at 6s. every twelve Leaves. The Supplements may be had separately. The first is.—The second is. 6d.
Those who purchase the Copies of T. W. and have a several growth,
Entered at Stationers' Hall.] 1819. [J. Hamer, Printer, Tabernacle-Wall.]

かみやねる。
 リの讀美歌集は次の
 ような原題のものであ
 る。図版①(《リッポン》博
 士の讀美歌集)のウ
 オーカーの姉妹編。II
 百八十曲以上の愛好讀
 美歌ならびに樂曲およ
 び新作讀美歌ならびに
 樂曲のノンクン^{ノン}ン
 (じゅうれの曲も博士の
 選集^{セレクション}に含まれや)。
 六十二の韻律により、
 オルガン、ピアノ、ホオ
 ル等に編曲し、伴奏
 いはをねいなう。(以

『ルソーの夢』がはじめて讀美歌に転用されたのは、たしかに マス・ウォーカーの『リッポン博士の讀美歌集統篇』であるが、現在私がたしかめえた範囲でも、一八一九年に刊行された第四版にすでに収録され、

(下省略) 補遺は第四版。ロンドン。T. ウォーカー印刷・販売、スピタルフィールズ、ショム・ハイアード、ベトリー・ヒル一番地 1
(社) 八一九年。
 下省略) 補遺は第四版。ロンドン。T. ウォーカー印刷・販売、スピタルフィールズ、ショム・ハイアード、ベトリー・ヒル一番地 1

(注一) «Walker's Companion/to/Dr. Rippon's Tune Book;/

Being a Collection of above Two Hundred and Eighty/
 Favourite and Original/Hymn Tunes and Pieces./None
 of which are in his Selections.) In Sixty-two Measures./

Adapted to, and Figured for the Organ, Piano Forte, &c. //

Fourth Edition, with Supplements./London:/Printed for
 and Sold by T. Walker, 21, Red Lion Street, Spitalfields;/
 etc./1819.»

のなどに(リッポン)博士の讀美歌集とは、英國の教会音楽出版者ジニア・ラッセル(一七五一—一八三六)が一七九一年に刊行した『最良の作者たる、三三声および四声の聖歌ならびに讀美歌選集』のいとや、リの曲集は出版当時から英國では大いに名高い、現在までの調査では一七九七年に第八版を刊行して以来、が、初版、そしてリの第八版にもルソーの夢は収録されていない。

(注二) «A Selection of Psalm and Hymn Tunes/From the
 Best Authors, in Three and Four Parts;/By John Rippon
 A.M.»

▼ 譜例 ②

265 ROUSSEAU'S DREAM

Hymn 66x41 D.R.S. or Dr Collyers 668 (19th)

Gracious God, my heart is full of thankfulness, I am now but longing to find my way
To the land of health. And till I want no more.

トマス・ウォーカーはこのリボン博士の編集協力者であり、その立場で統篇、姉妹篇を編集したものであった。その中に、一八一〇年代に作られ、英國で愛好されていたクラーマーの『ルソーヌの夢』を取り入れ、これにテキストを附したものである。歌詞については、のちに立ち帰つてくることにして、ウォーカーの曲集に第二六五曲として収められた楽譜を一瞥してみよう（譜例②）。曲は『ルソーの夢』と題され、三段の五線譜で書かれていて、三声のようであるが、『ルソーの夢』の旋律が記された中央の五線には小さな音符でさらに一声ないし二声がつけ加えられている。こうした附加的な小さな音符を含めて、私たちの注意をつよく惹くのは、下二段、すなわち上段のぞく大譜表はバスのわずかな変化をのぞけば、クラーマーの変奏主題をそ

トマス・ウォーカーはこのリボン博士の編集協力者であり、その立場で統篇、姉妹篇を編集したものであった。その中に、一八一〇年代に作られ、英國で愛好されていたクラーマーの『ルソーヌの夢』を取り入れ、これにテキストを附したものである。歌詞については、のちに立ち帰つてくることにして、ウォーカーの曲集に第二六五曲として収められた楽譜を一瞥してみよう（譜例②）。曲は『ルソーの夢』と題され、三段の五線譜で書かれていて、三声のようであるが、『ルソーの夢』の旋律が記された中央の五線には小さな音符でさらに一声ないし二声がつけ加えられている。こうした附加的な小さな音符を含めて、私たちの注意をつよく惹くのは、下二段、すなわち上段のぞく大譜表はバスのわずかな変化をのぞけば、クラーマーの変奏主題をそ

のままに持ち込んでいることである。ヘ長調、四分の四拍子（原曲は一分の二拍子）と調号も変わりないが、ピアニステイックな冒頭のアルペッジョもそのままであり、付点リズムもそのまま。わずかにタイやスラーを省く一方、中間部のBではピアノからクリッシェンドしてフォルテへとデュナーミクの指示を加えているのみである。

これはクラーマーの『ルソーの夢』を讃美歌にふさわしいかたちで手を加えて、新しい讃美歌のメロディーを作り上げるといふいわゆる編曲のかたちではなく、まさに器楽曲としての『ルソーの夢』を直接そのまま転用したものなのである。これはクラーマーの『ルソーの夢』が、当時いかにポピュラーな愛好曲となつていたかを示す端的な例証というべきであろうか。

いずれにしても、こうしてクラーマーの『ルソーの夢』の讃美歌の世界での旅路が、はやくも一八一〇年代にはじめられたことはうだがいないのである。それは十九世紀一杯をかけて長い巡礼の旅をつけ、やがては私たちの日本にまで辿りつくのだ。次にその経緯のあらましを語つてみたい。

（国立音楽大学）

☆世界の子どもたち☆

遠い国の親戚マジヤール

——ハンガリーの国を訪ねて——

西 森 穎 子

ハンガリーへの旅立ち

いるのだ。

ハンガリーという国を感じたのは、個展を開催した折、ギャラリーに姿を現わした一女性との出会いからだった。そこには、ハンガリーといふ國について、日本人はあまりよく知らない。ところがハンガリー人（自称マジャール人）は、日本のことを見た目、流暢な日本語を話すハンガリー生れの日本人に対する親しみと憧れの感情を持つて

ハンガリーといふ國を身近に感じたのは、個展を開催した折、ギャラリーに姿を現わした一女性との出会いからだった。それは、ハンガリーといふ國について、日本人はあまりよく知らない。ところがハンガリー人（自称マジャール人）は、日本のことを見た目、流暢な日本語を話すハンガリー生れの日本人に対する親しみと憧れの感情を持つて

彼女の協力もあって、ブダペストに住む教育関係者から「ぜひ児童画の合同展をしましょう」という誘いがきた。児童画を通して子どもたちが広く世界へ目を向けて、一つになつて手をつなぎ合い、円といつつの調和の中から豊かな情操と愛が芽生える糸口になるのなら、「よし、合同展をしよう」と私は大決心をして、三百枚近い日本の子どもたちの絵を持参してハンガリー

へ向つたのは、一九七七年の九月のことだった。彼女と知り合つて八か月目には、カタリースさんの生れ故郷ブダペストに来ていたことになる。

初めて見るハンガリーの首都ブダペストとは、ドナウ河畔にゴシックスタイルの建物が壮麗に影を映し、逆光の時に見る国會議事堂は、ドームと八十八の尖塔のシルエットだけが映しだされ、墨絵の様な実に静かなたたずまいだった。

ブダペストという名は、"丘"を意味するブダと、"平野"を意味するペストからなつてゐるが、そのブダ側の丘の上には、ソ連軍によるナチからの解放を記念する碑が建てられており、それだけにまたソ連による重圧感も感じられた。

幼稚園での絵画

ブダペスト市内の幼稚園を見学してみた

が、幼稚園として独立した一つの建物では

うだ。

なく、七階建てのビルの五階が幼稚園だった。他の階は市民の住宅や事務所になつており、外でのお遊びは、近くの広い公園につれていて遊ばせていた。

なお、幼稚園にしてもお店にても全て国営である。幼稚園では、三歳から六歳まで（六歳の九月から小学校）、朝の六時から夕方の六時まで園児の世話をしている。

全ての女性が働くハンガリーでは、幼稚園で子どもの世話をし

てもらえるので、安心して仕事を専念することができる。ただし子どもが三歳になるまでは、母親が家でみるとは許されていた。そ

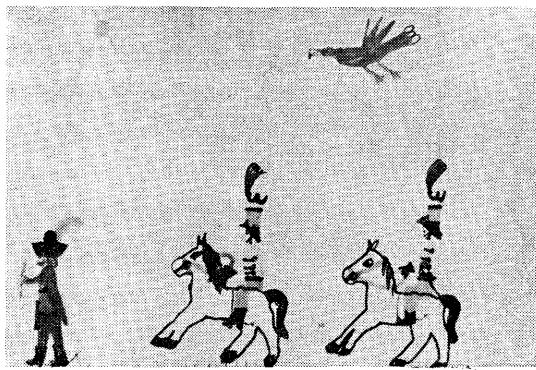
私がちょうど幼稚園を訪ねた時は、年長組のお絵描きの時間で、まず最初に感じたことは、一枚の紙にしても一本のクレヨンにしてもその材質の悪さだった。クレヨンで描くと蠟がとれてきて画用紙にのりにくく、それは日本と比べられないほどの悪さだった。

しかし子どもたちは、とても楽しそうに描いており、のぞいてみると、特にナジ・



ガヴール君の「パイプをくわえているおとうさん」の絵は材質の悪さを乗り越え、クレヨン運びも生き生きと、心豊かな温かさを感じさせた。

もうすぐ四歳になる園児の「駅に送りに来たおじいちゃんの涙」は、線描だけのも



のだったが、感情の入った力強い絵だった。このイショトヴァン君は、描くことが何より好きな年長組の子どもだった。今はカラー・マジックに興味を持ち、とにかく早い運びで、トルコ戦争にしても馬や兵士など、色あいもよくドンドン描していくのは驚くばかりであった。

材質の悪さなどの規制の中で、子どもたちに創造性や素朴さ、夢を与えているものは何なのだろう？ その生活をのぞいてみると、日本の周囲から失なわれている自然が、ハンガリーでは豊富にあった。自然から生まれてくる色あいが豊かであり、温かいイメージとなって溢れていた。規制されればされるほど、逆に欲望となって創造性を導き出してくるようだった。

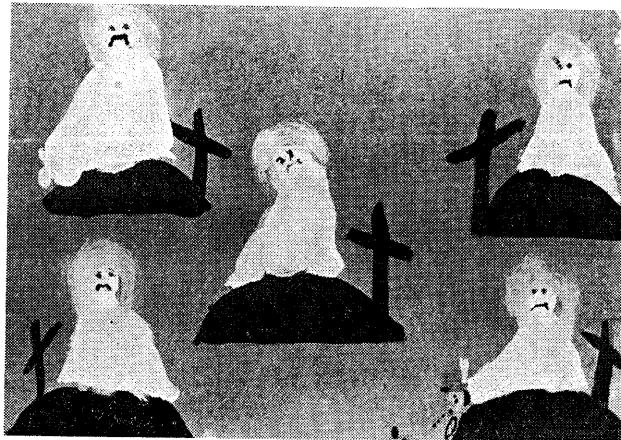
作曲家コダーリ・ゾルタンがハンガリーで昔から歌い伝えられた子どもの歌を、音楽教育の中心として、歌、踊、楽器を使って情操教育をする独特的のコダーリ・システムがある。小学校の絵画授業（四年生）を見学した時、子どもたちの歓迎の歌が、とても自然でこの教育の成果としての心豊かな生活を垣間みる思いがした。

その日は、専門の美術教師のもとでクマのぬいぐるみの写生をしていたが、創造性を深める一つとして、ハンガリーの最大の詩人ペトーフィーの詩を聞かせて絵にする方法もとられている。ペトーフィーは今から一五〇年前、ハンガリー平野中央部の田舎で生れ、二十代の前半に発表した多くの詩集は、自由を求める素朴な彼の情熱が、当時ハンガリー社会に浸透していたナショナリズムの高まりと結びついて短期間にうちに熱狂的な人気を得た人である。

小学校での絵画

この国には、ハンガリーが生んだ偉大な

独立戦争（一八四八年）の時、民衆の前



で朗読した「起きよ、マジャール人!!」や自然の美しさを讃えた詩など、素敵な詩がたくさんある。子どものために書いたという長編叙事詩「勇者ヤーノシュ」は、牧童の若者ヤーノシュが、死んだ恋人を生きかえらせるには『命の池』へバラの花を一輪投げ込むことだと神からのお告げで知り、この命の池を世界中、至難の試練を克服して、探し求めていく話である。

この至難の中に、七つの顔を持つ化物の姿をした竜との戦い、おし寄せてくる魔法使いの群れとの戦いがあり、疲れて寝こんだところが墓のそばで、お化けどもが出て来てヤーノシュを殺すおもしろい相談をするところがあつて、楽しい叙事詩である。

六歳から十四歳の子どもにペトーフィの詩を聞かせて描かせた絵を見たところ、戦争の詩にしても暗いイメージ

の絵ではなく、実際に色彩も美しく、表現も豊かで楽しいもの多かった。また「勇者ヤーノシュ」の絵にしても夢があり、筆運びも生き生きして、おもしろく表現していた。

児童合同展

ハンガリーの子どもの絵と、日本から持参した子どもの絵との合同展覧会場には、子どもづれのお母さんや先生が、たくさん訪れ、「遠い親戚」としての日本へ、憧れに似た思いをいろいろとめぐらしているようであった。

展示されている日本の子どもの絵の中でも、UFOをテーマにした絵を指さし、「これは何か」という質問が子どもたちから集中した。日本で話題になっているUFOの説明をすると、ハンガリーにはUFOの話題すらないので、UFOのことをオバ

ケくらいに思つて驚くだけで、科学者が認めない限り興味を持つとも思しなかつたのである。

日本の神社の絵に目がとまり、礼拝する

建物なのに十字架がつかないのは不思議で

あると、親子で首をひねりあつたり、

特に園児たちは日本の田んぼの風景画に大

へん興味を示していた。水につかって田植

えをしている絵等に、次から次へと質問が

出て目を輝かしていたのである。ハンガリ

ーの主食はパンで麦をつくるのに対し、日

本は米という生活様式の違いから田んぼを

見たこともない園児たちから楽しい質問ぜ

めにあつたのであった。

気候風土からくる色彩の違いは見られた
ものの、今や創造する心は世界皆同じで、
レベルに差はない様に思われた。

普ダベストの公園から、今もわらべ歌が
きこえています。日本の「カゴメ、カゴメ」
のよくな、一人目をとじて坐つているおさ
げの子。その子を囲んでまわります。

春の風、

水が流される、

小鳥の全ては、恋人を選びます。

私の花よ、花よ。

私は誰を選びましょうか。

花よ、花よ。

私はあなたを、

あなたは私を、選びましょう。

小さな手と手のつなぎの輪が、世界へ向
けて、大きな夢を創造していく。

(画 家)



紙風船屋さん

皆川美恵子

銀の吹口からフッと息を吹き込むと、ポックリ丸くなる紙風船。いったい紙で丸い球体を作るということを、誰がいつ頃に考へついたのでしょうか？ 紙風船は日本にだけあって、他の国にはないようですから、日本で創り出されたおもちゃだと思われます。

私達の祖先は、着物、足袋、雨合羽、傘、それに水筒、椀といった身の回りの生活の品々を、これまでに紙で創り出して来ました。紙風船もこの紙の文化の中から生み出された、子どものおもちゃなのでしょう。

この道五十年以上の永江さん

しまづに自と空気が入り脹らむしくみ、そしてそれらを支える紙の材質や製作技術など——つまり一言でいえばデザインが何と優れているか気づかれます。

今回の児童文化探訪は、東京に一軒だけ残る紙風船屋さんをお訪ねして、どのように作るのか昔から不思議に思っていた、紙風船の作り方をはじめ、いろいろのお話を聞かせていただきました。

紙風船は糊と紙だけで作られる至極単純な玩具です。しかし、紙風船を手にとり、よく眺めてみると、色と形、つき上げると

紙風船屋さんは、戦前は東京に二十軒ありました。しかし

今では、田端にお住まいの永江さんのところ一軒だけになっています。

永江重之さんは明治四十三年三月十五日生まれで今年六十歳。昔ながらの“手貼り”による方法で紙風船を作り続けています。

永江さんが紙風船とかかわりをもつたのは大正十一年の十二歳の時で、お姉さんが入谷にあった紙風船屋の水野さんというところに嫁いだ時に、手の数はたくさんほしいということで、お母さんと弟の重之さんもいっしょに手伝いに行つたことから始まりました。ですから、かれこれ五十余年、紙風船と共に暮してきたことになります。

永江さんは、水野さんのところで、高等小学校に通いながら、店の小僧として仕事を手伝いました。その頃は、紙風船が作るそばから売れるという盛んな時代で、間屋さんや内職の家々を行ったり来たりの忙しい毎日だったそうです。

紙風船は、紙風船屋の職人さんによつても作られましたが、紙を染め、裁断し、ただ貼るだけにして、内職仕事として外に多く出されていました。紙風船を貼るのは手先を使う難しい仕事ですが、手をとつて教え、當時、百軒以上の内職家庭を抱えていたといいます。今では紙風船の内職をやる人が少なくなり、昔から続いている年をとつた人数人と、永江さん夫婦とが細々と作つています。

永江さんが紙風船の作り方を教わった、義理のお兄さんには、山田貞三郎さんは、山田さんというところで紙風船を習いました。その山田さんの家は、紙風船屋としては由緒のある本家本元らしく、水野さんはそこで修業したことをいつも自慢にして話す。自らを「山田屋水貞」と名乗つていたといいます。

さて、その山田さんにも誰かに紙風船を習つたわけです。水野さんは永江さんより二十歳以上も年上ということですから、もし今生きているとしたら九十歳でしょう。その九十歳の人が教わった山田さんなり、その山田さんの親方のことを考へると、明治を越え江戸時代末期へと遡つてゆくことができます。

それなら紙風船は、江戸時代のいつ頃から、誰によつて作られるようになったのでしょうか？ 残念ながら当時の風俗誌には、紙風船のことは何も記されておらず、詳しいことは何一つわかりません。

紙風船の作り方

紙風船には小さなものは五寸（約一五cm）から大きなものは二尺（約六〇cm）までと大きさで実に二十種類以上があります。そ

して大きくなるに従って、八枚貼り、十枚貼り、十二枚貼りと貼り合わせる紙が多くなっていきます。

ここでは二五四、八枚貼りの紙風船を例にとって、詳しく作り方を紹介してみることにしましょう。

《ぬき型で生地をとる》

舟型をした一枚一枚の紙を“生地”と呼びますが、この生地や、口や底になる円形の紙は、ぬき型を使って切りぬいてゆきます。

そのためには前もって紙を揃えておかなければならず、これが神経のいる大事な予備作業です。

紙は菓包紙や本のカバーに用いる、あの薄い半透明なグラシンペーパーです。永江さんのところの紙風船は、現在六色（赤・黄・黄緑・白・レンガ・緑）で構成されていますから、その配色を考え、次のような二組のものを揃えてゆきます。

まず一組は、黄緑、レンガ、緑、赤の四色のグラシンペーパーをこの順序で繰り返しながら一百枚重ね、それを縫じて、二綴四百枚を揃えます。もう一組は、紙風船に二度ずつ使われて地色となる黄と白を重ねてゆき、二百枚を縫じて、やはり二綴四百枚をきれいに揃えます。こうして揃えたものには、上から重おもしをして一日間位おき、中の空気を抜きます。

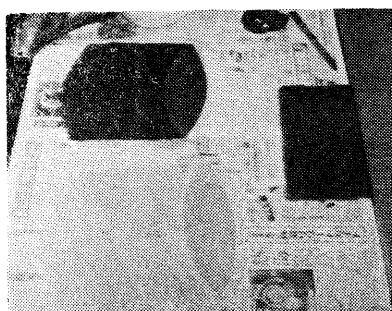
このように準備が整ったら、先が刃物になつてゐるぬき型を置き、その上にあて木を載せ、その上から木槌でポンポン叩いて、生地を切り抜いてゆきます。余った部分では、円形の口や底を、やはりぬき型を使ってとつてゆきます。四色重ね四百枚と二色重ね四百枚の合計八百枚の生地からは、百個の紙風船が出来上がるこ

とになります。

《八枚の生地を貼り合わせる》

さて次に、目を見張るような紙風船屋さんの美事な業わざがはじまります。四色重ねの

生地の組と二色重ねの生地の組を、それぞれのしてゆき、糊はしする分を作るのです。のされてできた糊はしろの部分を目と呼びますが、この目がどうも等しく虹のようになります。内職に出でます。



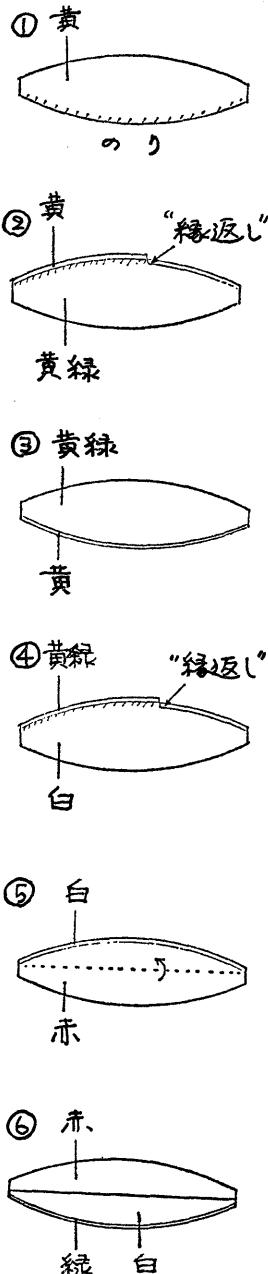
四色重ね（黄緑・レンガ・緑・赤）の組と二色重ね（黄・白）の組の交互から一枚づつとって、中央の敷布の上で貼り合わせてゆく

は、この均等に目を出す作業が一番難しく、これが上手にできないと、貼り合わせるのもうまくゆきません。

次に、目に糊をしいていきますが、この時、糊を二度塗りします。

一度塗っただけでは糊は紙になじまず、紙のがびたりして、貼つてゆくと皺も寄つてしまふのです。一度塗つたら少し時間を置いて浸みこませ、もう一度塗ると糊の効きもよく、仕事もきれいにゆくということです。このことは全ての糊仕事のコツだそうです。

貼り合わせていくには、まず二色重ねの方から黄の生地一枚を取り、糊のついた方を手前にして置きます。(①) 次に四色重ねの方から黄緑を取り、糊のついた方を向うにして、黄の上に置いてゆきます。この時、黄緑を少し下にずらして置き、黄の縁を手



前に折り上げて、黄緑の糊の部分につけていきます。(②) これを“縁返し”といいますが、黄緑の上縁をきちんと押さないと動いてズレてしまうので、指先の熟練を要します。

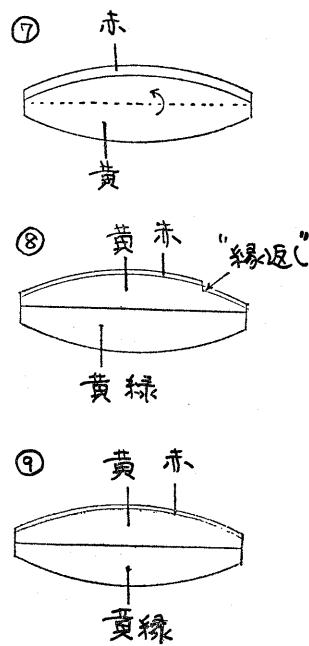
黄と黄緑が貼り合わさったら、貼り合わせた方を手前側に置き直して(③)、この上に二色重ねから白を取り、やはり糊のついた方を向うにして、糊しる分を控えて黄緑の上に置きます。そして黄緑の縁を縁返ししてゆきます。(④)

黄緑と白がついたら、また向うを手前に置き直して、これまでと同じ要領で、レンガ色、黄、緑、白、赤と八枚を次々に貼り合わせてゆきます。

そして最後の赤の生地と、最初の黄の生地を貼り合わせるのに

は、赤の生地を半分のところで折り上げ(⑤～⑥)、表と裏をひつ

の方は隙間だらけ。初めてやる人は百個貼ってみて、そのうち十個できれば良いほうで、そういう人なら内職の仕事もできるそうです。

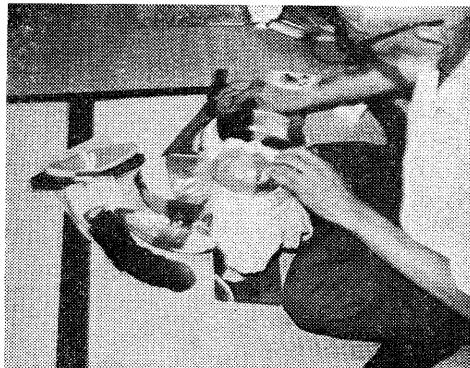


紙風船とは立体のものですが、紙を貼り合わせて作る過程は、すべて平面においてです。まるで着物を折り畳むように平らなところに紙を重ね、縁を返し、糊づけしていくだけなのです。出来上ったものもベッタソなものです。この思いもかけない作り方で、丸い紙風船が出来上ってゆくのです。

『口と底つける』

口や底をつけるには、空気を入れ、丸くした紙風船を二つに帽子の形に折り、穴のまわりにひだができないように注意してのばし、『坊様』と呼ぶ針坊主を大きくしたものの上に載せて貼ってゆきます。

吹口のところは、昔は金紙、銀紙を使っていま



したが、今では安全基準が喧しく、嘗めてもいよいよとアルミ箔が使われています。

こうして出来上った紙風船は、五個を重ねて三つ折にし、それを十寄せ、五十にして白い紙紐をわたし、一々にして問屋に出すわけです。この二五寸の紙風船は小売りで一個あたり六十円から七十円で売られているそうですが、永江さんのところを出る時は、二十七円だということでした。

紙風船の今昔

永江さんが小僧をしていた大正十年頃は、ロール紙を用いて紙風船を作っていたということです。ロール紙というのは、昔、お菓子屋さんでお菓子を入れた紙袋の、あの白い紙です。しかし日本製のロール紙は品質が悪く、隙間があつて息がもれてしまうというので、スウェーデン製のロール紙を使っていました。白いロール紙は染料で染めていったわけですが、染紙は、糊で貼り合わせる際に色が落ちるので、糊を煮る時には塩を一つまみ入れて、それを防ぎました。

糊のことを永江さんは「しめ糊、しめ糊」と言います。しかし

そこは江戸っ子、「姫糊」のことだと思われます。糊は昔も今も姫糊で、化学糊はあまりにも粘着力が強く、やり直しあきがないので、この仕事には使われません。

今のような半透明のグラシンペーパーになったのは、昭和のはじめ頃です。このグラシンペーパーは紙を漉く段階で染料を入れてしまうために、染紙と異なり、触って色が落ちるなどの心配がなくなり、糊仕事もきれいに仕上がるようになりました。

またグラシンペーパーは表裏がありません。ですから染紙の時には、のしたり糊をしく時に気を配りましたが、その心配がなくなり、仕事は楽になったようです。

グラシンペーパーになり、何といつても素晴らしいことは、紙風船の中に桜の花形が入るようになったことではないでしょうか。息を吹き入れると、透けた紙風船の中でクルクル花吹雪が起ころうになつたのです。花形に切った紙のほかには、小さな鉛も入れました。しかしこの場合には、紙風船を束ねるとぶつかって紙が切れ、扱いには大いに困ったということです。

紙風船の配色は、地が白と黄で、あとの四色は、赤、緑、紫、牡丹というのが長い間の標準でした。しかし、五、六年前から紫と牡丹の色紙が製造中止となり、永江さんのところでは、そのかわりに黄緑色とレンガ色を用いて紙風船を作っています。

全国に三軒だけ残る紙風船屋さん

紙風船は現在では、東京の永江さんほか、新潟県出雲崎の磯野信吾さん、埼玉県行田の岡野文次郎さんと、三軒だけになっています。

磯野さんの話によると、出雲崎で紙風船を作るようになったのは大正八年のことと、長い冬の間、出漁の日数の少ない魚村の収入を僅かでも上げたいと、お父さんが紙風船を導入したそうです。磯野さんのお姉さんが上京し、"手貼り"を習得して帰り、

皆に広めたそうですが、昭和の初めに東京で"つる貼り"という能率的で簡便な方法が考案されると、その方法も取り入れ、今に至っています。

"つる貼り"というのは、穂受けのような曲がったつるの上で、舟型をした生地を提灯のように貼ってゆき、丸く貼り終つたら穴からそつとつるをぬくもので、この方法では紙風船が初めから丸くなつてゆきます。

"手貼り"による紙風船と"つる貼り"による紙風船は見たところ同じようですが、その出来上りをよく見ると違っています。"手貼り"の場合は、赤、緑、レンガ、黄緑の濃い色が、薄い白や黄

の地色の上に、両端がのるように貼り合わされています。"つる貼り"の方は、全ての生地が、片端が上になつたら、もう片端は下となるように貼られているわけです。ですから仕上りは、"手貼り"の方が美しいといえると思います。

しかし"手貼り"では十四畳位の小さな紙風船を作るのは難しく、"つる貼り"の方が容易に貼れます。昭和十年頃、紙風船の中に小さな紙風船(豆風船)を入れた親子風船というものが作られましたが、これは"つる貼り"だから出来たといえます。反対に、大きい紙風船は、重さがあるので"つる貼り"だとはがれてしまつて向きません。

さて、足袋の町行田で紙風船が作られるようになったのは、戦前、織維関係が暇になり、足袋を入れる紙袋のグラシンペーパーがたくさん余り出し、これにおもちゃ屋さんが目をつけたのに始まります。神田には大きなおもちゃ問屋大西屋があり、そこの主人は行田出身でした。その為、行田周辺の人は、その人を頼つておもちゃ屋の世界に多く入ってきたのです。行田には、内職で足袋を作りなれて、手先の器用な人が多かつたこともあり、紙風船の内職が起つてゆきました。

戦争になると疎開で、おもちゃ屋さんたちは行田に帰つてゆきました。そしてそのままそこで紙風船屋になる人も多かつたわけ

です。戦後は、東京で紙風船がほとんど作られなくなり、行田で多く作られるようになっていきます。しかし行田にあった六・七軒の紙風船屋さんも、今では岡野さんのところ唯一軒になってしましました。

永江さんは「やる人がだんだん少なくなつてゆく仕事というのは、それだけ魅力がないんだよ。紙のおもちゃは安いものと思われているでしょ、一生懸命苦労して作つても利益がないのね。だから減びていくのね」と言います。しかし、「つる貼り」の紙風船にも、ポリエチレンで作る風船にも手を出さず、今でもひたすら美しい“手貼り”的紙風船を作り続けている永江さんは、紙風船が好きでならないのだと思われます。

それをわかっている奥さんは、御主人に反対されたそうですがプラモデルを中心とした小売りのおもちゃ屋を開いて、紙風船屋を続ける助けにしています。その奥さんが「今年（昭和五十三年のこと）はどうしてか特に紙風船が売れないのよ。もう紙風船はみんなに忘れられたのかなつて言つてたのよ」と話していました。

詩人黒田三郎さんに「紙風船」と題された詩があります。「落ちたら 今度は もうと高く もうともと高く 何度も

打ちあげよう 美しい 願いごとのように」というのですが、半透明で、虹のように美しい紙風船が、これからいつまでも高く打ちあげられることを祈るのは、一人私だけではないでしょう。

日本保育学会第32回大会のお知らせ

期日 昭和54年5月19日(土)・20日(日)

会場 明星大学

大会に関する連絡先は次のとおりです。

〒191 東京都日野市程久保337

明星大学人文学部心理教育学科

日本保育学会第32回大会準備委員会

(岡田正章)

電話 0425(91)5111 内線 315

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究—（一十七）

津守真

命令すること

五歳児の一学期には、二年目、三年目の子どもたちは、以前に比べると、自分で遊べるようになっていることが多いことはたしかである。しかし、遊ぶときにおとなとの手を要求する子どもも絶えることがない。Kは五歳の一学期にはそのような状態にあつた。

私が砂場にゆくと、すぐに、Nががまがえるを手にのせて見せてくる。数人の男児が山や川をつくり水を流している。

私を見つけてKがくる。「穴を掘れ」と命令口調で言う。私は穴を掘る。一寸手を休めると、「早く掘れ」「もっと掘れ」と言う。自分は何もしないで、砂場の縁に立っている。私は砂場の穴掘りは、他の子どもについて、何度も手伝ったことがある。穴に対する

五月二十三日

る子どもの関心がいろいろと察せられて、面白いことがあるのが普通である。ところがこの場合は、私は穴を掘らされているのであって、穴を掘る興味を子どもと分ち合う楽しさがない。私は

「穴の中に何があるんだ?」とたずねると、「貝がある」と言い、

「早く土の出るところまで掘れ」と言う。私はようやくかなり深くまで掘る。Kは落し穴だからと新聞紙を持つてくる。ここで初めで、私もKの考えていた落し穴であったことが分る。新聞紙を穴の上にひろげるが、穴が大きすぎて、じきに紙が落ちそうになる。

「だから大きすぎると言ったじゃないか」とKは言う。私も、こゝを押さえている、ここに砂をのせろなど言いながら、いろいろと工夫したが、新聞紙は砂とともに穴の中に落ちてしまった。結局、Kは足で穴を埋めてしまい、足が埋まつたことから、足うめになる。他の子どもも来て、足をうめてくれと言う。Kは「もう砂をかける」「後もうめる」など、次々と命令する。

特に、自分で考えてやることができなくて、人に要求することが多い」と言う。三歳児からの子どもはそれほどでないが、四歳からのおどもにそれがはげしいという。

子どもからでも、命令されるということは愉快なことではない。おとなが子どもに命令するのは当然のこととみなされるが、子どもがおとなに命令するのは逆の関係だから、おとのの権威感を傷つけることにもなる。しかし、おとなはそこで感情的に反応するのであつてはならないと思う。もしもそうしたら、おとなとの相互の柔軟な関係を断ち切ることとなり、子どもは一層かたくなになり、また、反抗的となるだろう。この子どもの家庭背景など私は全く知らないのであるが、この子どもと接していく私はかたくなさや人間関係の柔軟性の欠如などを感じさせられた。また、この子どもの中に自然に湧き起る遊びの原動力とも云うべき創造的な心の流露が、どこかで阻まれたのではないかと思われた。これは推察の域を脱しないのであるが、この子どもの命令的行動の背後には、多くのことがかくされているのではないかと思われた。

この日は、私は、言いかえしたり、しゃべったりしながら、Kの命令の遂行者となつた。保育のあと、担任のH先生は、Kと私のやりとりを見てのことかどうか分らないが、「今年の五歳児は、

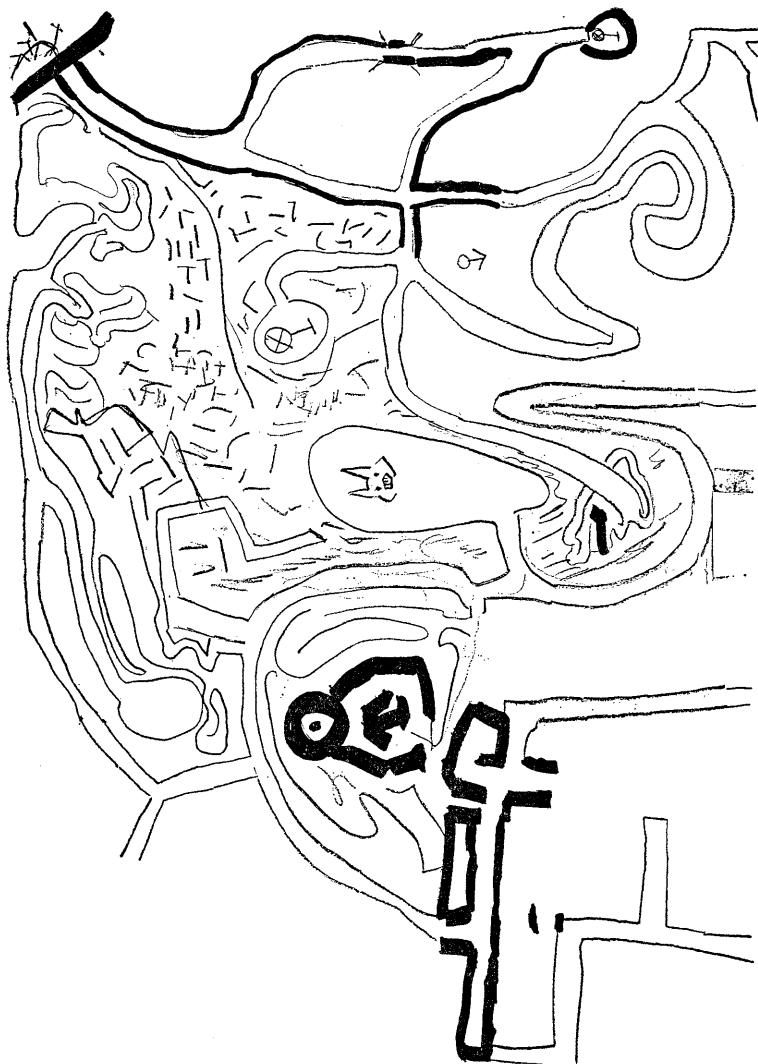
それから一月程たつた七月四日に、同じ砂場で、私はKが他の子どもたち数人と、水道から柵を渡して水を砂山のトンネルの中に流して遊んでいるところに会った。このときは、私が傍にいても、Kは全く私に順着せず、他の子どもたちとやりとりしながら遊んでいる、その柔軟な相互性(mutuality)に私は驚いた。担任のH先生に、私のその思想を話すと、「やつとこのごろ、自分で遊べるようになつたんです。今学期のはじめころ、Kをつき放すようにしたら、かえつて依存的になつて、このごろ手をかけるようにしたら、自分で遊べるようになつたんです。」とのことであった。手をかけるようにしたら、命令的行動が消えて、自分で遊べるようになったというのであるから、命令行動によつておとなとの接触を求めていたと考えてよいだろう。おとなは子どもの命令に従うのではなく、柔軟な応待をしながら、密な接触を保つのが、手をかけるということであろう。そのことが、子ども自身の生活を、また、他人との相互関係を育てることになるのである。

Kの命令的行動に関して、更に後になつて気が付かされたことがあつた。

三学期になつて間もないころ、(一月十六日) Kは床に腰をおろして、ビニールのたこを作つてゐる。定規をあてて、鉛筆で直線を引き、そのまわりをはさみできちんと切る。時間をかけて、ひとりで丹念にやつてゐる。私はその傍で他の子どもと遊んでいたが、ひとりで黙々と作つてゐる姿に感心して見ていた。午後から私はたこの糸目をつけるのを手伝つたが、糸の長さを等分にきちんと切らないと承知しない。当然のことながら、それではたこはうまく上らない。それでもKは、糸の長さを正確に等分にすることに固執する。

その翌々日(一月十八日)、Kは一人でのこぎりで木を切つてゐる。鉛筆で直線が引いてあり、その線の通りに切ろうとしている。一人で頑張つてゐる。こういう場面を見ると、K一人の世界の中にも、自分に命令する基準(直線を引いて、その上を正確に切らねばならないというような)があるようと思われる。その命令基準は、この場合には直線によつて象徴されている。五月の砂場で私にあんなに次々と命令したのは、穴の形や大きさがKの頭の中にはすでにでき上つてゐたのである。たこ作りや木片切り

▼ 図 1



では、自分一人の世界で自分が命令に従うことを努力しているのである。こういう命令基準が作られるに至ったのには、この子ども自身の過去の何らかの体験の集積があるのであろう。それが何であるのかは、いまのところわからない。けれども、このことが場合によつては自分をも不幸にし、他人をも苦しめることになるのであると思う。おそらく、このことは、この子ども自身がまだ当分ひきずつて歩かなくてはならない課題であろう。

それからしばらくして、二月六日に、Kは私のところにきて、「迷路つくろう」と言う。白い画用紙をもつてきて、私にかけてくれといふので、私が鉛筆で路をかくと、Kはその上をマジックでていねいになぞる。（前頁の図1参照）Kはここが出発点だと言つて、マジックで直線を引いて出発する所をきめる。私が迷路の路をかいてゆくと、行き止りがないと言つて、Kは袋小路を作つてゆく。そのうちに、マジックで目標の終点地をかくが、そこに至る路を作るのではなく、路をあちこちにのばし、その路を辿つてゆくと、草沼のような「生き地獄」（Kがこのように言う。）に入りこんでしまう。結局、目標に至る路は作られず、いくつもの袋小路と、いくつもの生き地獄に至る路が画かれただのがこの迷路であった。おとなのかいた線の上をマジックでなぞるという、自らに課した命令を遂行することからはじめ、その

ゆきづくところが袋小路と生き地獄であることは、一見強そうに見えながら、K自身が負つてゐる精神的課題の重さを示しているようと思われる。それでも、この日には、線の上をなぞるだけではなく、それとは独立に目標地点が作り出されたことは、未来への可能性の片鱗がうかがわれるよう思う。

迷路つくりのあと、Kは山の上で赤土でだんごつくりをする。Kは赤土をこねて、「うんこみたい」と言う。私もその赤土を掌の中で圧縮すると、そのような感触がある。こういう混沌の作業の安らぎが、精悍で緊張質なKには必要なのであると思う。

五月の砂場でKの命令的な行動に立ち返つて考えてみると、この命令的行動は、第一にはおとなとの接触を求めていたことのあらわれであり、そこには、自分の頭の中に作られた基準に合わせようとする努力のあらわれであつたと考えられる。Kが自分らしく遊ぶことができるようになるのには、K自身の負つてゐるこうした課題をのりこえねばならない。すなわち、Kの命令的行動を

も拒絶することなく、身に引き受けて、柔軟に応待するおとなを、つまり、おとなが手をかけることを必要としている。また、K自身が自分の目標をもって、それを実現する体験を必要としている。それには、おとなから与えられた目標ではなく、泥こねのように、自分自身の中から自然に次の目標が生れ出るような素材にもうとふれることがよいのではないだろうか。それによって、自分自身の中の各部分がもっと調和のとれたものとなるであろう。また、対人関係においても、もっと柔軟な、対等な態度が作られてゆくであろう。

やがてに継続してこの子どもと接する機会があれば、彼の命令的行動^{*注}についても、新たな角度からの理解ができるだろう。ここに述べたことは、その一部にすぎない。新たな保育的接觸が加われば、それだけ子どもの理解も増してゆくのである。(つづく)

直線、規則的系列等の意味がある。知覚面での直線や秩序を求めることが命令行動と関連あることを示すものではないだろうか。見たところが秩序を保っていないと、秩序を整えようとして、命令することになる。知覚面での秩序に対する寛容度には個人差があることは、心理学の研究で知られている。その個人差が大きいことは、命令行動の個人してできるのかは明らかではないが、このことは命令行動の個人差となり関係があるのである。

command は、命令し、支配することであるが、ラテン原語では、集めて手の中に収めるという意味である。それだから、眺望をして全体を見渡すといったときに、この語を用いる。全体の眺望ができるときに、位置づけや整頓が行なわれることになり、そこから命令行動が生ずることになるであろう。日本語の「おほせ(仰せ)」は、人に背負わせることであり、自分の荷物を人に負わせるの意であるといいう。

これらの問題については、おとの社会においても、考えるべきことが多くあり、いひで尽くすこととはできない。今後の課題として残したい。

注 命令は、英語では、order と command との語が対応する。order は秩序とも訳されるが、ラテン原語では、真直な列、

エリザベス・ギャスケル

『マイ・アイ・ダイアリー』④

笛川真理子 訳

一八三七年 十二月九日

一年ぶりに書くのは、全く恥ずかしい思いがします。それには確かに、悲しい訳があったのです。私は一八三七年二月五日にかわいいミータが生まれるまで、とても健康がすぐれず、ナッツフオードに呼び戻された時にも（三月十日）、まだ元気を回復していませんでした。私の母以上の人である最愛のラム伯母さんが、三月八日の水曜日、中風の卒中で倒れたのです。私は二人の幼い娘達と召使いのベツィーと一緒に八週間の間、ナッツフオードの宿に泊っていました。そして五月一日、私は最良の友を失ったのです。あの方が私に示して下さったあらゆる親切に対し、神が報いて下さいますように！

その後しばらくの間、私は大変体の調子が悪く、七月にはクロ

スピーヘ行きました。九月に、ウイリアムと私は、マリアンヌを⁽²⁾ベツィー・ホランドに、ミータをディーン夫人にあずけて、三週間ウェールズへ行きました。それは、私達が召使いのベツィーを失つてしまつたからなのです。ベツィーはお姉さんがなくなつたために彼女が家に必要となり、私達の所を去らざるをえなかつたのです。でも、私達は彼女をずっと友達と思つていますし、彼女はこの秋数週間、私達と一緒に過ごしたりもしました。彼女の後には、利発な召使いのエリザベスがきました。彼女は子ども達に対して、特に小さなミータにはとても優しくしてくれます。私は家庭関係におけるこのような小さい変化の話をしますが、これも、もしこの本が私の死後（そう私は望んでいます）ですがマリアンヌに渡された時には、あの娘は、私が時々何気なく言つていたこともみな十分に理解してくれるかもしれません。

私の最愛の伯母さんがこの家を最後に去った際に（一八三七年

一月十五日）、伯母さんはマリアンヌをナップフォードへ連れて帰り、私の近づいたお産の間中、マリアンヌと一緒にいたのです。ラム伯母さんの視力は大変弱っていたので、伯母さんは手紙が書けませんでした。そこで私は、私のかわいい子の話を、格別な話は何も、そして健康についての普通のたよりでさえ、聞くことができなかつたのです。しかしそれ以来、私はいとこ達などに、マリアンヌがラム伯母さんと、伯母さんが最後の病に襲われるまで一緒に過ごした七週間の間に起つた、目立つたことはすべて、私に話してほしいと頼みました。彼らは、ラム伯母さんが「彼女の小さなマリアンヌ」をとてもかわいがつていたようだ、と言っています。

ある日、誰かが外で伯母さんに会いました。伯母さんは、外出して一時間位になり、こんなに長い時間マリアンヌを置いてきたことはないと思うので、家へ急いでいる所なんですよ、と言いました。その幼い子は、ラム伯母さんのベッドの側の小さなベッドで眠っていました。ラム伯母さんは、窓ぎわでの娘を膝にのせてすわり、愛に満ちたちよとした楽しいお話をいつぱいかわしながら、あの娘に朝食を与えました。ラム伯母さんはお天気のいい時には、あの娘をつれて散歩に出ました。そして、マリアンヌが少しでも困ったことがあると走り寄つたのはラム伯母さんであり、あの娘がいつもまとわりついていたのも、ラム伯母さんだつたのです。

ラム伯母さんが致命的な発作に襲われたその日、伯母さんはマ

リアンヌと一緒に、ディーンさんの子馬の馬車で幼稚園へ行つてきました。そしてマリアンヌが喜ぶのを、とても喜んでいたのです。

その夜十時半頃、伯母さんは中風の卒中をおこしたのです。マリアンヌはいつものように、ラム伯母さんのベッドの側の小さなソファーベッドにおり、朝までそこにいました。そして朝、あの娘は習慣通り、ラム伯母さんのベッドに入りました。しかし、ラム伯母さんは、入れてもらいたがつているその小さな声も、耳にとどかなかつたのです。そしてみんながあの娘に、「ラム伯母さんはご病気だったのよ」と言うと、あの娘は「ラム伯母さん、ご病気なのかどうか私に言ってよ」と言い続けていました。もちろん、あの娘は私が行くまで、友達の家に行かれていましたが、私達はその不幸な八週間というものの、二つの小さな部屋に閉じこめられていて、小さな娘達はほとんど外へ出ることができませんでした。しかし、子どもの気質にはあのように悪い環境だつたのですが、マリアンヌは小さな良き慰めでした。

ラム伯母さんは最初の卒中の後一週間位して、あの娘に会いました。そこで私はマリアンヌをつれて行きました。しかし、その部屋は暗く、陰氣でした。ラム伯母さんは頭に蛭(3)をつけており、その頭はまるで亡骸のようにな、ハンカチで巻きつけられていたのです。マリアンヌは恐かったと思います。私はラム伯母さんが、もういつもの伯母さんではなく（ああ！）目が見えなかつたのですが、それに気づくのではないかと心配しました。

次の時には、伯母さんはナイトキャップをかぶせてもらうよう
に頼み、枕の後ろにいちじくを置かせました。それでマリアンヌ

は納得して、その部屋で遊びました。あの娘は数回行きました
が、あの娘の訪れはいつも、ラム伯母さんを喜ばせました。

五月一日、ラム伯母さんがなくなつた日は、大変うらかな春
の日で——それまでのどんよりとしたお天氣とは、全く対照的な
ものでした。

三日に、私達はみなマンチャスターに帰つてきました。そして
その時、私は小さな部屋に長く閉じこもつていたことが、マリア
ンヌの気質に影響したのを心配し始めたのです。かわいそうな
子！ あの娘は氣むずかしく、時には少し頑固になつたりもしま
した。それなのにベッティーは行つてしまい、新しい召使いがや
つてくる、これは子どもにとつて、一つの試練だと思います。で
もそれは、その慰めたり手伝つたりしてここに下さつたエ
リガ叔母さんの、忍耐強い優しい扱いですぐになくなりました。

私達はあの娘に、ラム伯母さんは死んでしまつたとは、けつし
て話していません。というのは、子どもの感覚的な心が、悲しみ
と大変祝福された考え方を結びつけてしまうかもしれない、と心
配するからです。それは、「神の民のために備えられた安息の地
へ去りぬ」という考えなのです。しかし私はよく伯母さんの話を
したり、伯母さんの愛と優しさの思い出を生かし続けようとした
り、またラム伯母さんの絵を見せたりします。その伯母さんの風
貌は、（それは大変に静まつた純粹な魂にふさわしい聖堂^{セント}なので
すが）、あの娘の子どもの記憶の中にもはつきりと、しつかりと
据えられるかもしません。

ある日、私達が話している時にあの娘は言いました。「ラム伯
母さんはご病気だつたわね」「いいえ」と私は言いました。「伯母
さんはもう元気になつて、しあわせにしていますよ」「本当？」
と私のいとしい子は答えました。「ああ、よかったです。行ってごき
げん伺わなくちゃ」そしてそれ以後（九月）、あの娘はナッツフ
オードにいたのです。そしてあの娘は、ラム伯母さんはもうアブ
伯母さんと一緒に住んでいくなくて、あの家を出て行つてしまつ
たの、と私に言つたのです。私は、伯母さんは「人の手によらぬ
永遠の天国の家へ移された」のよ、とどんなに言つたこと
でしよう。でも、私は言わない方が良いと思つました。あの娘に
はまだ、それが理解できないでしようから。

九月にナッツフオードへ行く前に、あの娘はまた二、三日、素
直でない、頑固なことがありますでした。しかしあちらにいる間、あ
の娘は非常に賢明な扱いを受けたのでしよう。大変優しく、愛ら
しい、いい子になつて戻つてきたのですから。確かに、私は、あ
の娘の気質はとても優しくて、その性質はとても愛らしいとまで
言つたでしよう。あの娘の小さな良心も発達して、よく気づき、
よく判断できるようになつてきました。

あの娘の罪の大半は、（ほとんど罪などというものではない
のですが）時々頑固の発作をおこす以外は不注意によるものだと
思ひます。しかし私達は、罰に対する恐れを恐れだけではなく、び

しつと実行しますので、これらの小さな頑固さも、次第に消えてゆくことでしょう。私達があの娘に与える罰は、あの娘を連れて

行って、明るい部屋に五分かその位、一人にしておくことです。

私達はあの娘に時間の長さを教えますが、あの娘はその時間を、

私達が気まぐれには動かされないもの、と思うかもしません。

が、また、泣いて（その部屋を出るという）自分の我を通すことがあります。

一回、たった一回だけ、私達は厳しい罰を用いました。それはある日曜日の夜のこと、五週間程前のことだったと思ひます。私達はあの娘の知的の発達への不安からというより、この長い冬の夜の過ごし方として、あの娘にあの娘の名前の文字を教えようとしていました。あの娘は母音字はみなわかりますが、ただAを言おうとしないのです。他のものはみな言いますのに、一度も後についてAと繰り返して言おうとしないのです。

私達は躍起になってあの娘にそれを言わせようとしたが、あの娘は意地になっていました。ミーティアが眠っていたので、私達は、あの娘が二階へ連れて行かれるといつも出す、大きな泣き声をたてさせたくありませんでした。そこでヴィリアムはあの娘がそれを言おうとしない度に、あの娘の手をびしやりと打ちました。それでとうとう最後には、あの娘はとてもしつかりとそれを言つたのです。今ではっきり覚えていますが、私達はとてもみじめな気持ちがして、あの娘が寝てしまふと泣いたものでした。私は、それが正しかったのかどうかわかりません。もし正しくな

かつたなら、どうぞ、マリアンヌ、私達を許してね。

それ以来、私達はあの娘がまたお稽古を始めたいという欲求を見せるまでは、それ以上何のお稽古もしていません。そして私は、あの娘が意欲を取り戻してきているように思ひます。というのは、あの娘は本を手に取つて、場合場合によつて「これはA」とか「これはO」とか一人言をいつているからです。

あの娘はどんなにしても、あの娘の年の割に発達が進んでいるとは言えません。でもけつして、何らかの点で発達が欠けているのではないか。あの娘は、もつとも純然たる真実でさえある、宗教につながつてゆくことについては、何も尋ねたことがありません。私はそのようなものが少しでもないと、待ち構えていますのに、あの娘はお手伝いをするようになり、自分のことは自分でするようになつてきます。自分やまた他の人々のためにちょっとしたことをしますし、パパのスリッパを持ってあげるなど、お手伝いすることを自分で考へています。今日、彼がでかけようとしていて、あの娘は台所に用事に行つていたのですが、彼が玄関のドアを開けようとしているのを聞きつけると、あの娘はこう叫びながら走つて行つたのです。「待って、パパ、パパ、でかける前にあたしにキスしなくちゃいけないわ」

さて、小さなミーティアの方ですが。今月の五日で十ヶ月になります。あの娘はマリアンヌよりずっと激しい氣質を持つています。それにもつと活潑だと思います。しかし、小さな狭い一室で屋も夜も過ごしたあの八週間が、あの娘の氣質に何か影響したのかも

しれない、時々思うこともあります。あの娘はすべて調子の良い時には、とても明るくて陽気で、またとても人なつこいのです——特にパパとエリザベスに。小さなおしゃまさんは、ママよりもあの二人が好きなのです。あの娘は、あんなに優しくはないにしても、マリアンヌよりずっと賢くなるだろうと思います。もし私がそのやり方さえ知っていたら、働きかけるべき大変すばらしい素質があると確信しています。

あの娘はとても健康ですが、一週間だけ例外がありました。それはあの娘が九ヶ月と二週間位の時でした。マリアンヌがひどい病気をしたのとちょうど同じ頃、同じ歯が生えてきたのでした。しかしこれは、その種のものとしても、そんなに激しいものではありませんでした。あの娘はこの二ヶ月からそちらで、四本の歯が生えました。あの娘はマリアンヌの時より背があつてほつそりしていて、しかもカーペットの上を上手に転がつたり、はいはいができる、ずっと丈夫なのです。あの娘はマリアンヌに似ています。あんなに良い顔色はしていず、笑くほどもありませんが、マリアンヌより長いまつ毛をしています。あの娘はつかまり立ちが完全にできるわけではありませんが、それも間近いことでしょう。あの娘はまだちょっとした芸ができませんが、それは、ただ教えられることがないからなのです。あの娘は私達をみな、名前で区別できます。一、二度、私はエリザベスが、そこにはいないパパやディッキー（鳥）の名を探してごらんなどいと言つて、不機嫌なあの娘の注意をそらしているのを聞いたことがあります。こ

れを、私がちゃんとやめさせなかつたのを心配しています。二人のかわいい姉妹達は、お互いが大好きです。マリアンヌはミータが欲しがるものは何でも、あげてしまします。時々私が多すぎるとと思う位に。そしてミータは、何かちょっとしたおもちゃをなくしても、また少し困ったことがあると全く頼りきつて、マリアンヌの助けを求めるのです。それにマリアンヌの声を聞くと、あの娘は喜んで声をあげたり、はねたりします。

ああ！ 私はこの愛が続きますようにと望まずにはいられません。私はそれを育むよう、全力を尽くさなければなりません。ああ！ 神よ、この二人のかわいい子らについての、私の良き志をお助け下さい。私はあの娘達の他には、何の支えも持たないのですから。アーメン

（津田塾大学）

註

- (1) ギャスケル夫人は生後一年足らずで実母と死に別れており、この母方のラム伯母に幼児期、少女期を通じ慈しみ育てられた。
- (2) ナッソフオード在の母方の伯父、ピーター・ホランドの妻。
- (3) 医用の血吸ヒルで、各国とも昔からその特性を利用して瀉血をおこなつた。
- (4) マリアンヌを引き寄せるために、乾しいちじくを隠しておいて与えたのだと思われる。
- (5) ウィリアムの妹。ギャスケル夫人とは手紙のやりとりなど、とても親しかつた。
- (6) 母方の伯母アビゲールのこと。

訂正とお詫び

四月号掲載のみどり会夏季合宿研修会のお知らせのうち、講演、並びに分科会講師の先生のお名前が、当方の手違いにて一部、まちがっておりました。まことに申しわけなく、次のようにお詫びして、訂正させていただきますのでご了承ください。なお、日時、場所、参加費等は既報のとおりでございますが、詳細を知りたい方は切手同封でご請求ください。

みどり会研究部



講 演	講師 お茶の水女子大学教授	河野 重男先生
分 科 会	第 1 幼児のモラルを考えよう	勝部 真長先生
	第 2 保育の理論と実践	津守 真先生
	第 3 子どもの文化	本田 和子先生
	第 4 障害児をめぐって	平井 信義先生
	第 5 幼児と自然	太田 次郎先生
	第 6 子どもをみる目	立川多恵子先生
	第 7 母親教育	みどり会々長 山村 きよ先生

M・Jラングフェルトは、人間の成熟への要請として次の諸点を挙げている。

- 1、人と出会うこと
- 2、共に加わること
- 3、助けること
- 4、理解すること
- 5、説明すること
- 6、時には拒否すること
- 7、そのことの意味を発見すること。

(to meet, to join, to help, to understand, to explain, to refuse, to feel adequately what things mean) 第一の人の出会い方は、その後のすべてを決定する重要なことである。先入観なしに、他者と出会うことは、云うのは易いが実際には至難のことである。第二、三、四是、実践にかかることがある。人と出会って後に直ちに私共のすることは、その人と一緒に何かをすることがある。最初からすねたり、拒否したり、反逆したのでは次の世界が開けない。一緒に参加して作り上げてゆこうとするとき、私共の助力を必要としている人を見つけるのである。そのとき

に惜しみなく助けることによって私共は他人を理解することができる。理解という語は英語では下に立つという意味である(上から見ていたのでは子どもを理解することはできない)。そこで第五には、以上の実践によって得られた私共の見解を、他人に分るように説明する誠実な努力が要請される。そして時によっては断乎として拒否を表明する毅然たる態度も必要となる。以上のことを経た後に、そのことの意味を発見することができるようになる。この第七の点は実践の後に得られる知恵といふこともできよう。私共の社会生活に処する態度を考えてみると、これらの諸点がその順序で含まれているように思うし、保育における子どもとのかかわりを考えても同様である。ラングフェルト氏の、機械論的人間観に対立する人間学的人間観の深い思索の結果であり、何度も考えることのできる諸点である。

(津守真)

幼児の教育 第七十八卷第六号

六月号 ◎ 定価二五〇円

昭和五十四年五月二十五日 印刷

昭和五十四年六月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼発行人 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館現代幼児教育研究会 15周年記念 全国大会開催のお知らせ



■開催日 昭和54年8月5日(日)・6日(月)・7日(火)
■会場 札幌市 札幌市民会館

フレーベル館現代幼児教育研究会は、去る昭和40年に発足以来、幼児教育に携わる全国の先生方に親しまれながら発展してまいりました。

特にここ数年間は、全国大会を休会致し、地区研究会の充実を図り、全国各地で実施致しましたところ、多大なご好評を賜わり、多数のご参加をいただき有難くお礼申し上げます。

今年度は、現代幼児教育研究会創設15周年を迎えるに当り、全国の先生方のご要望にお応えし、札幌市に於て全国大会を開催することと致しました。

「子どものやる気を育てる保育」を大会テーマとして、充実した講師の先生方により、理論と実践を踏まえて、先生方のこれから保育にお役立ていただけよう計画致しております。

先生方の多数のご参加をいただいて、実り多い大会になりますようご指導ご協力ををお願い申し上げます。

詳細につきましては、担当店よりご案内状をお届け申し上げます。

フレーベル館現代幼児教育研究会事務局

〒101 東京都千代田区神田小川町3-1 TEL(03)292-7781(代)

キンダーブック

今年も内容を
充実させて、
楽しくわかりやすくしました。

なつのおともだち

①年中用



②年長用



★年少用



子どもたちが楽しみながら、いろいろなことを考え、学びとり、充実した遊びができるように配慮してあります。

定価200円 A4判

年中用の編集方針を基本としさらに、子どもたちが夏休みの楽しい遊びに積極的に参加し、その中から自分の仕事を発見できるように配慮してあります。 定価200円 A4判

園にはいって初めての夏休みを迎える子どもたちが、楽しく、元気に夏を過ごせるよう、また、基本的な生活習慣が身につくように配慮してあります。 定価200円 A4判

●付録 [①年中用・②年長用共]

「なつのせいかつ」[生活表] B5判 16頁

1週間ごとに約束事項を変えたり、簡単な日記にもなるよう、1頁1週間にあります。また、旅行の際にも持ち運びやすいように冊子にまとめ、楽しい遊びや工作の頁もついています。

「せいかつシール」 B6判

晴、曇、雨のお天気シールの他に、夏季保育[登園日]や子どもたちの思い出に残る特別なできごとのあった日に貼るシールもついた、楽しいシールです。 裁培用“コマツナ”的たね

●付録 「なつのせいかつ」

[生活表] B4判二つ折

「せいかつシール」 B7判

晴、曇、雨のお天気シールの他に、夏季保育[登園日]や子どもたちの思い出に残る特別なできごとのあった日に貼るシールもついた、楽しいシールです。 裁培用“コマツナ”的たね

★もよりの代理店・支社・支店・営業所へお申し込みください

フレーベル館